

エアフォース・オンライン:
フェアリーズ

Bishop1911

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

SAO事件から数年後。

ザ・シードによってVRゲームの世界が大きく広がり、

数多くのゲームが生まれては消えていく中、

とあるALOプレイヤーが妖精の飛び交う

ALOをベースに新たなゲームを生み出した。

エアフォース・オンライン

読んで字のごとく、飛び交うのは妖精ではなくミサイルと砲弾。

背中にあるのは妖精の羽ではなく鋼鉄の翼。

ある者は仲間のため、ある者は名誉のため、ある者は金のために今日も仮想世界の空を駆ける。

ユリシーズの厄災から数年。

秩序という名のパワーバランスが崩壊した世界は厄災からの復興を目指して11の国家共同体を

構成する傍らで、石油、鉱物資源、水、領土、難民、ありとあらゆるものを巡って争いを続けた。

その中で正規軍に変わって台頭し始めたのがプライベートティアだった。

軍需産業と密接に結びついた彼らは戦争経済を回し続ける歯車として、今日も復興のための破壊を続ける。

*機体のスペック等はほぼ全て

エースコンバット インフィニティを基にしています。

リアルのスペックを持ち出すと面倒だし、

どうせわからないし、資料によって変わると思うし：e t c
ストーリーはエースコンバット各作品を参考にしながら

インフィニティを軸にアレコレと。

そんなこんなで悪しからず。

目次

61	# 8	K i l l Z o n e	I I	
	# 7	K i l l Z o n e	I	52
	# 6	灰の中から	I I	44
	# 5	灰の中から	I	37
27	# 4	バッテン基地防空戦	I I I	
19	# 3	バッテン基地防空戦	I I	
	# 2	バッテン基地防空戦	I	12
	# 1	引き金		7
		とある雑誌の1ページ		1

	# 15	S u r p r i s e d	I	
102	# 14	F r o n t l i n e	I I	
95	# 13	F r o n t l i n e	I	
85	# 12	P e a c e f u l d a y		
	I			80
	# 11	N e x t t o n e x t	I	72
	# 10	N e x t t o n e x t	I	
68	# 9	K i l l Z o n e	I I I	

I #
I 3
I 3

F
a
l
l
i
n
g

A
n
g
e
l

とある雑誌の1ページ

Q1: このゲームを開発する動機を教えてください。

動機ですか？

そうですねえ…ALLOってわかります？

僕もやってたんですけど。

空を飛ぶってやっぱり人類共通のロマンだと思っんですよ。

でもALLOじゃなんか物足りないなーって思ったのが

1番最初ですかね。

僕、学生時代に戦闘機系のゲームやってた影響で

戦闘機が大好きなんですけど、

その流れで自衛隊の航空祭に行った時に

ああ…あのF-35Aのパイロットは自分の手足のように…

ああ、F-35Aってのは空自の戦闘機の名前です。

Q2：世界観ってどんな感じですか？

世界観って言っても国同士でどんばちやったって

ALLOの二の舞いみたいになって

堅苦しい思いするじゃ無いですか。

だからAFOではソロプレイヤーでもある程度楽しめるように色々頑張ったんですよ！

ログインボーナスやらデイリー…あ、ネタバレかな？

とにかく、国同士の対立関係的なストーリーは

アツプデート後のイベントで計画してるんで、

待っててください。

Q3：エースコンバットファンが多いと噂ですが？

ですなーw

僕は違うんですけど、他のメンバーは大半が

そのゲームのファンだったみたいで。

Q4：では、イベントも期待できますか？

努力します!! w

Q5：課金システムが導入されるという話ですが？

おっしゃる通りです。

言いにくい話、僕らもタダで働けるわけでは無いので。

皆さんの財力で僕に美味しいご飯を食べさせて下さい w
でもゲームバランスを考えて、

あまりにも影響が大きいアイテムに関しては
購入制限の導入も検討します。

Q6：長寿作と期待されている話。

なんか擬人化っただけですごく騒がれてますよねw
戦闘機版「○これ」「アズ○ン」とかいっ感じで。

でもプレイヤーのアバターによつて

似合う似合わないはあると思うので

それも楽しみ方の1つだと思えます。

続くかどうかは皆さんに買っていただけるかどうかですよー！

Q7：そしてお値段。

なんとニーキュッパっ！と言いたいんですが、

残念ながら6000円くらいです…

学生諸君、ごめんなさいm (| |) m

これでも結構頑張った。

Q8：初回特典すごくないですか？

ふふ…やっぱり？ものすごい額の出資があつたのでw

通常版の値段を6000円に抑えたのもこのお陰です。

その分、初回特典版は7500円程度の予定なんですが、この出資がなかったらもつとお高かったかも…

Q9：最後に一言。

皆さんにも僕の夢見た空を体験してもらえたら嬉しいです。
僕らも皆さんが思う存分に楽しめるよう

精一杯頑張るので応援よろしくです(？^?)ゞ

—————

端末をスリープモードにして空を見上げた。

遙か上空には飛行機雲が伸びている。

「…あー…、早く帰ってきてー…ぶっ!？」

昼休みの屋上。壁に背を預ける俺の頭に

上から何かが落ちてきた。

「またゲームか。」

見上げると、俺が背を預ける壁の上で昼食を取っていた

幼馴染が本を片手に見下ろしている。

風が吹いて彼女の髪が、ついでにスカートがなびく。

「…悪いかよ。あとお前、パンツ見えてんぞ。」

さつき俺の頭上に落ちてきたであろう紙パックのジュースに

ストローを挿しながら、今時まだ紙媒体を愛用している

幼馴染に「女らしく無いぞ」と嫌味を込めて言う。

「死ね。これはスパッツ。見られても良い。」

全く効果はないが。

#1 引き金

雲ひとつない青空。

地平線の果てまで続く熱帯雨林が現実世界の蒸し暑さを
思い出させる。

ーピコンっ

何をするでもなく遊覧飛行を楽しんでいた俺は、

視界左下に表示されたレーダーに機影を見つけた。

サイズからして輸送機か、はたまた爆撃機か…。

向こうも遊覧飛行中なのだろうか？

敵味方識別装置にも反応はない。

…というか、ソロの俺にとっては金を払うヤツが味方だ。

ともかく撃墜すればかなりの報酬が手に入る。

問題は護衛機だが、レーダーに視線を戻してみても

反応はさつきと変わらず。

今現在一応雇われてはいるが、

次のクラン対抗イベントに備えての使いっ走りばかりで最近までもに撃墜スコアが伸びない。

このままだと他のソロプレイヤーに仕事を奪われかねない。

ここで一稼ぎするのも悪くは無いだろう。

俺はヘルメットのバイザーを下ろし、火器管制システムを起動した。

「シヨウ、エンジン」

誰に向けてでもなくそう呟いた俺は、

エンジン出力を上げて加速させる。

頬を撫でる風が強くなり、

下に広がる景色があつという間に流れていく。

数十秒もしないうちにレーダーの機影を目視で捉えた。

背中の翼は可変翼。腹に抱え込むようにランドセルのような

爆弾槽を身につけている。間違いなくB-1B爆撃機だ。

アメリカが冷戦期に開発した可変翼超音速戦略爆撃機で、

無論、戦略爆撃機というからには核爆弾も搭載できるが、

このゲームでの核爆弾は課金アイテムで、

購入しようとするれば乗用車が1台買えるため、

日本サーバーで購入したバカは1人しか居ないらしい。

B—1Bの真横をすれ違うように通り抜け、

垂直尾翼のエンブレムを見る。

不気味な笑い声が今にも聞こえてきそうなピエロの顔を

あしらったエンブレムだ。

相手のクランがどれほどの実力かなんて気にした事もない俺に

エンブレムだけでクランを識別するなんてできるはずもなく、

それ以上は考えるのをやめた。

Uターンして背後に着いた俺は相手を射程内に収める。

<テメエ俺が誰だかわかってんだろうな！

ああ、答えなくていい！俺をロックオンしている時点で

わかっていないだろうからな。

まあ、いいや。相手は選んだ方がいいという

格好の教材になるだろう。

授業料はあとで取り立てにいくので悪しからず！>

B—1Bのプレイヤーが俺の方を振り返ってギャアギャアと

文句を言ってくるが、この手の脅し文句はフェアリーズが

サービス開始してすぐの頃に横行した。虎の威を借る狐”戦法だ。しかし、大抵は大したことないヤツばかりと聞いたことがある。

それに、それほどのプレイヤーが

護衛機も付けずに爆撃機で遊覧飛行なんてするわけが無い。

俺はB—1Bにまず通常のミサイルでロックオンしたが、

俺がミサイルを発射すると同時に

すぐさま相手はフレアをばら撒いて加速した。

背中に背負う翼から切り離されたミサイルが火を吹きながら

B—1Bがばら撒いたフレアの1つを追跡して自爆した。

爆発音とともに相手は体を大きく振動させ、

さらにフレアと罵声をオープンチャンネルでばら撒き続ける。

可変翼を閉じてあつという間に音速へと向かうB—1Bへ向けて

通常ミサイルでロックした俺はもう1発発射した。

「フオックス2」

俺はリロードを終えた通常ミサイルとレーダー誘導が必要な

特殊兵装のS A A Mを立て続けに発射する。

S A A Mの存在に気づいていないのか、大量のフレアを

ばら撒き続けるそいつは断末魔とともに爆散した。

シヨウ「S A A M」トード 10000

キルログに表示された名前に目も止めず、

報酬の1万クレジットの使い道を考え始めた俺は
仮加入中のクランベースへと進路を変えた。

#2 バッテン基地防空戦 I

土曜日の朝。

朝早くから自宅前を駆け抜けて行く同級生を尻目に
大きなあくびをしてカーテンを閉めた俺は、

二度寝の誘惑に抗いながらリビングに向かった。

高校進学とともに姉ちゃんと同居し始めた俺は

仕事で家を飛び出していった姉ちゃんと入れ替わるように
リビングを占領し、テレビをつける。

無論、お決まりの偏向報道になど興味のない俺は

テレビをタブレット端末と同期させて

AFOのトップニュースを画面に映し出させる。

冷蔵庫から取り出した牛乳とコーヒーを

キッチンの上に置いたコップで混ぜて

口に含んだ俺は今日のAFO内のニュースに目を通す。

ーピコン

ニュースが更新された。

『AFO最大クラン “マジ卍” “シグレニ同盟”へ宣戦布告』

「ふうおっ!!」

口に含んだコーヒー牛乳を全てシンクに口と言わず

鼻からも噴き出した俺はすぐさま端末を操作した。

やはり、トップニュース更新の数秒前から

非常招集のメールが十数秒おきに送られている。

朝食を片付けて自室へ駆け込む俺は自問自答を続ける。

なぜ? どうして?!

俺が雇われているするシグレニ同盟は

レベルの低いクランのはずだ。

そんな食っても身にならないクランにAFOトップクラスのクラン、マジ卍が宣戦布告だなんて意味がわからない…!

誰かが喧嘩を売ったとしか考えられない。

大急ぎでベッドに滑り込んだ俺は

すぐさまアミュスフィアを起動した。

「リンク・スタート！」

シグレニ同盟

バッテン基地格納庫

格納庫にスポーンした俺はすぐさまメニュー画面を開いて

あらかじめシグレニ同盟の幹部が作成したブリーフィングビデオを

再生して機体の準備をする。

『まず、朝早くからお集まり頂いたプレイヤー諸君に感謝する。

時間がないので早速、本題に入るが、

我々シグレニ同盟の基地であるここ、バッテン基地に

マジ卍の航空戦力が接近中だ。』

克蘭マスターのイケメンメガネが基地の防空設備では

迎撃が難しい事や向こう側にステルス機が居ることを言っている間に、

俺は特殊兵装の選択を済ませて装備決定ボタンをタップした。

『また、1番滑走路では輸送機が離陸中だ。

迎撃機は2番滑走路のみの使用となる。』

「バカか……さっさと迎撃機上げろよ。」

思わず愚痴をこぼす俺の頭上から降りてきたアームが

背中にF/A-18Fの特徴的な折りたたみ式の翼を装着した。

パイロンからは俺が選択した4 AAMという4機同時に

ロックオンできるお気に入りのミサイルが吊るされている。

威力を比較すればS A A Mを使いたいが、

空対空の乱戦でS A A Mを誘導し続けるのは難しい。

6 kmの長射程もどこにいるかわからないステルス機に邪魔されれば活かしきれないだろう。

それはともかく、最後に20 mmバルカン砲を腕に装着して機体セットの準備は完了だ。

出撃準備が完了した俺は格納庫から滑走路に向かうのと同時進行で

主翼や尾翼、垂直尾翼の動作を確認する。

空襲警報のサイレンが鳴り響く滑走路には

密林地帯特有の湿った空気に航空燃料の臭いが混じっていた。

手前の1番滑走路にはずんぐりむっくりとした胴体の輸送機が、リソースや整備用のパーツなど金目のものを満載して滑走路に長蛇の列を作っている。

2番滑走路は迎撃機のプレイヤーが2機ずつ離陸しているが、それでもかなりもたついている。

火器管制システムのチェックついでに無線を繋ぐと、滑走路の雰囲気同様に無線回線もピリピリとした雰囲気で覆われている。

《俺の機体はまだ飛ばないのか!?!》

《前のヤツは誰だ! さっさと飛べ!》

《静かにしろ空賊ども! 誘導ができないだろうが!》

しまいには管制のプレイヤーまで怒鳴りさす始末だ。

数分の待ち時間の後にようやく俺の番が回ってきた。

隣は同じくソロで傭兵をしている女性プレイヤーだ。

「おはよ…、シヨウ。」

「なんだ、マリーか。今日も僚機頼めるか?」

「オツケー」

俺とマリーがメニュー画面を開いて僚機申請の操作を

終わると同時に息を切らせたような声で管制官からの指示が入る。

『悪い、待たせた……シヨウとマリーだな？ 離陸を許可する！』

「了解」

腰のあたりに装着されたエンジンが轟音を立て始めると同時に

俺とマリーは離陸に必要な速度を稼ぐために助走を着ける。

俺のF/A-18Fよりも速度が速いマリーのMIG-29Aは

俺を置いて宙に浮く。俺も追いかけるように

走り幅跳びの要領で地面を蹴ると体がふわりと宙に浮いた。

『先行した部隊はすでに交戦中だ。今は数で押せているが、時間の問題だ。

出来るだけ急いでくれ。幸運を祈る。』

管制官からの指示に従ってマリーはアフターバーナーを使おうとするが、

「あ……」

俺を見て何か気づいたようにその手を止める。

「……遅い。」

「お前それ絶対に他人に言うなよ？」

そう、俺のF/A-18Fの最大速度がマッハ1.6なのに対し、

マリーのMIG-29Aはマッハ2.25も出せるのだ。

遅いと言われればぐうの音も出ないが、言い方と言うものがある。

「そっちに合わせる。最高速度で飛ばして。」

はいはいと言われた通りに最高速度のマツハ1.6を出す。

機体にかかる負荷はアミュスファイアを介してプレイヤーにも課されるため、俺は少し苦しいくらいだが、

対するマリリーは最高速度のおよそ半分しか出してないため涼しい顔をしている。

「…遅くない?」

「マリリー…、お前がソロの理由わかった。」

#3 バッテン基地防空戦 I I

『こちらはAWACSスカイアイ。臨時編成を行う。』

戦闘空域に入るとすぐに航空管制機からの無線が入った。

航空管制機はプレイヤーでは無く、いわゆるNPCだが、

ミサイルで狙われている時の警告や、

レーダーで捉えた目標の伝達と言った聞き流すわけにはいかない情報を伝えてくれる。

ソロでいる時はプレイヤーごとに個別に着き、

俺とマリーのように編隊を組めば各編隊ごとに着く。

少々無線が混乱することもあるが、

その分、データリンクで僚機のレーダー情報を共有して

ミサイルの誘導性能が上がったりするため、メリットの方が多い。

『ショウのコールサインはエコー1、

マリーのコールサインはエコー2だ。』

「エコー1、了解。」「エコー2、了解です。」

『これより防空任務の指示を行う。』

アルファ隊からデルタ隊はすでに交戦中だが、損耗が激しい。

エコー隊は方位3—0—0に進路を取り、

アルファ隊の支援に当たれ。』

防空任務中はAWACSからこんな感じで、

指示をもらうが、これは克蘭マスターかそれが任命した

克蘭メンバーからの指示を中継しているだけなので

克蘭によつてはポンコツな指揮を執るAWACSが居る。

しかし、今回のAWACSは頼りにできそうだ。

指示通りに方位3—0—0、つまり真北を0度とした時の時計回りに

300度なので、直進していれば良い。

「エコー2?。」

『何?。』

「特殊兵装は?。」

『HVAA、レベルは5』

HVAAは、Hyper—Velocity—Air—to—Air missile

e

つまり、超高速空対空ミサイルの略で、

文字通りとんでもない速さの飛行速度が売りのミサイルだ。

その分、誘導性能が低く設定されているため使い所はかなり選ぶが、敵機の背後に付けられればかなりの腕があるプレイヤーでない限り

実質回避不能だ。

それに加えてレベルが5ということは射程が7 kmほど。

7 km先の敵機を撃つても大抵は躲されるが、

それでも牽制くらいにはなる。

そして何気に俺よりスペックが高い。

『相手はネームドばかりでしょ？』

ミサイルばら撒いてもどうせ当たらない。』

そして全否定される俺の戦略。

中堅プレイヤーとしてのプライドが少し傷つくが

マリーの兵装や機体カテゴリーが戦闘機である事を含めて

戦略を立て直す。

今回の俺は相手を散らせる事に専念して、

ドッグファイトはマリーに任せる。

実質的な戦闘を女性プレイヤーに押し付けるのは少々気が引けるが、

お互いにソロの傭兵である以上は

性別もランクもレベルも関係ない。

重要なのは「どうすれば一番効率よく稼げるか」だ。

「わかった。俺が牽制するから

そつちは散ったヤツのどれかに着け。」

『オツケー、背中には任せる。』

空域に近づくと、ミサイルの尾が無数に交差しては

爆発している様子が見えてきた。

俺のヘルメット内蔵型のHMD（ヘッドマウントディスプレイ）にも

友軍と敵軍が青と緑のコンテナとして表示される。

『レーダーが敵機を捕捉した。』

エコー2の特殊兵装が射程内に入る。』

「まだだぞ?」

『わかってる。』

最高速度で飛んでいた俺は少し速度を落とす。

『エコーの特殊兵装が射程内に入る。』

A W A C S の声と同時に俺はマリーにハンドサインを送る。

「よし、行け。」

ミサイルを4 A A M に切り替えた俺のH M Dが

4機の敵機を捉えると同時に俺はマリーに指示を出した。

マツハ2・25まで加速する轟音を轟かせながら

マリーが飛んで行き、それを追いかけるように俺が発射した

4 A A M はマリーを追い越して敵機に向かって突っ込む。

ミサイルの接近を察知した敵機は交戦していたアルファ隊の

追尾をやめて回避行動に移る。

「こちらエコー隊。加勢するぞ。」

《こちらアルファ2、助かった！

ヤツらなかなかの腕だ…！ 気を付けてくれ！》

俺がアルファ隊に挨拶している間にもマリーは

敵機のうちの一機の背後を取って自慢のH V A Aをお見舞いする。

物理レーザーとも揶揄される超高速ミサイルは

あつという間に敵プレイヤーの背中から翼を挽ぎ取り、

翼を奪われた敵プレイヤーを密林に叩き落とした。

『エコー2が敵機を撃墜。』

それでも動じない敵チームの様子からして

やはり相手は最強クランのマジ卍で間違いなさそうだ。

敵チームも反撃しようとアルファ隊や、次のチャンスを

待つために離脱したマリーの方に機首を向けるが、

そうはさせない。

リロードを終えた4 A A Mをロックオンしてもう一度発射する。

残った3機は自分めがけて飛んでくるミサイルを躲すために

再び散り散りになり、そのうちの1機にマリーが喰らいつく。

寄せ集めながら体勢を立て直したアルファ隊も負けじと

2人1組で敵を追いかける。

マリーが敵プレイヤーを撃墜するのを眺めながら

データリンクを維持できる距離を保っていた俺の視界を

何かの影が横切った。

マズい……!

本能的にそう感じて体をひねって急旋回した。

ーヒュン ヒュン ズダダンッ

「ーっ!?!」

レーダーに反応は無かったし、AWACSからの情報も無かった。

『エコーが被弾。』

「遅ーよっ!」

思わず文句を言うが、今の今まで反応が無かったということは
おそらくステルス機だろう。

まさかステルス機を相手にする事になるとは…。

まんまと貧乏くじを引いたわけだが、

撃墜された時の機体修理費を考えれば

そう簡単に落ちるわけにはいかない。

『エコー、無事?!?』

2機目を撃墜して余裕ができたマリィがすぐさま反応する。

俺は上から下へ通り抜けていったステルス機を警戒しながら

回避起動を取る。

「大丈夫、それよりステルス機だ。警戒しろ。」

『…わかった。』

やや不満げなマリーの返事をよそに俺はもう一度
レーダーに目をやる。

いくら無敵のステルスでもミサイルを撃つ時には
ミサイルを機外に露出させる必要がある。

それを捉えられる可能性が僅かながらにあるからだ。

<ふつつふっふーん！よく躲したな！>

突然の、しかも幼い幼女の声に俺は思わず首をすくめた。

しかもオープンチャンネルで。

フェアリーズのアバターはALLOやGGOと同様に

自分では選べないはずだからロールプレイか…。

それはともかく、オープンチャンネルで会話とは…

敵だろうと味方だろうとバカに変わりはない。

「誰だ!？」

<よくぞ聞いてくれた！我こそはマジ卍のカトラス！

“雷神”の二つ名を持つ者だ！

空賊ども！討ち取って手柄とせい！>

…サムライか！

#4 バッテン基地防空戦

III

<討ち取って手柄とせい！>

サムライのような自己紹介に

普段の俺なら鼻で笑うかもしれないが、相手はネームド。

油断はできない。

敵機を2機とも撃墜し終えたアルファ隊も

今の通信を聞いていたようだが、きっと俺と同じような

反応をしていることだろう。

《ぐわっ!?!アルファ5被弾!》

リーダーとHMDから友軍を表す反応が1つ消えた。

アルファ隊の生き残りは残り1機だけだ。

俺とマリーを合わせても残り3機。

普通なら圧倒的に有利な状況だが、向こうはステルス機だ。

それも機種すら分かっていない。

二つ名を持ったネームドのプレイヤーはそれなりに情報が出回るが、

そういう情報を調べたこともない俺は二つ名を

聞いたところで相手が何を使うのかさっぱり分からない。

《クソ、思い出した！相手はF-35だ！》

俺とマリーの編隊に加わったアルファ2が吐き捨てるように叫ぶ。

F-35と言えばF-15相手の空戦で一度も

撃墜されたことがないという超強力な機体だ。

それ故にAFOでもかなりのレア扱いされている。

<にやはっ！>

雷神が笑った。

次の瞬間、

無数の機関砲弾がF-16Cを操るアルファ2を襲った。

体を斜めに横切るように十数発の砲弾を受けたアルファ2は

断末魔すら上げることなく爆散した。

「逃すかッ！」

猛スピードで急降下して逃げるF-35をマリーが追いかけて始めた。

レーダーに映らないとはいえ幽霊では無い。

目視で捉え続けなければ何とかなるはずだ。

それにF-35の最大速度はマッハ1.6で、

俺のF/A-18Fと対して変わらない。

ましてやマリーのMIG-29AはF-35よりも速い。

後に続くように急降下した俺は、早速通常ミサイルで

F-35の背中を捉えた。

「フォックス2！」

すかさずミサイルを発射。

マリーの真横を通り抜けたミサイルは

F-35に当たるように見えたが、

相手もフレアを放出してそれを躲す。

「はははっ！」

笑い声が無線を通して聞こえてくる。

『舐めるなッ！』

マリーも立て続けに通常ミサイルを2発発射するが、

今度はフレアすら使わずにローリングで躲される。

「よし、それじゃあボクの番だね！」

相手の声に思わず身構えた俺が

向こうの手を潰そうと特殊兵装の4 A A Mに切り替えた刹那、
くそれっ!!>

相手のF-35が垂直に近い角度で上を向き、減速した。

ー激突する

反射的に左右に別れた俺とマリーを見下ろす形で

やり過ぎすF-35のプレイヤーは、

見失うまいと彼女を目で追っていた俺とマリーに

指鉄砲を作って撃つような素振りを見せた。

「チッー」

相手の完全に舐めた飛び方に完全に頭に血が上っているマリーは
すぐに急減速し、ハイGターンで背後のF-35を追おうとする。

<楽しかったよ!また遊ぼーねーっ!>

しかし、F-35はクルリと向きを変えて

エリア外へ向かって一気に加速して逃げて行った。

そのスピードは確実にマツハ1.6よりも速い。

ゲーム性を維持するために燃料という概念が無いのを

良いことにマリーと俺はアフターバーナーで後を追うが、

俺はもちろん、マリーですら追いつくどころか
どんどん引き離されている。

『エコー2、それ以上は作戦エリア外だ。帰還せよ。』

A W A C Sからの無線でようやく諦めが着いたのか、
マリーは軽く舌打ちして引き返してきた。

「ムカつく…!!」

怒鳴り散らすタイプの怒り方をしないマリーは
ロックオンできさえすれば相手が鳥でも

全て撃ち落としてしまいそうなほど顔を真っ赤にして怒っている。

『当空域からの敵勢力排除を確認。』

エコー隊は基地へ帰還せよ。』

「エコー1、了解。」「エコー2…、了解。』

基地への道すがらに俺はさっきのF-35が
撃たなかった理由を考えていた。

A F Oは戦闘機の擬人化ゲームであるが故に、
機銃は腕に装着される。

つまり、機体が垂直になってもプレイヤーの姿勢は

地面に対して垂直で、言わば“気をつけ”の姿勢になるため、
撃とうと思えば指鉄砲で狙っていたあの一瞬の時間で

俺とマリーを2人とも撃墜できていた。

なのに撃たなかった。

単純に舐められているだけなのかもしれない。

しかし、何かもつと理由がある気がした俺は

さっきの空戦中の会話を何度も思い返してみるのが、

一向に納得のいく結論は出ない。

そうこうしているうちに地平線の先にバッテン基地が見えてきた。

思うところは色々あるが、何はともあれ、

A F O最強のクランから守り抜いた基地だ。報酬も弾むだろう。

もしかすると今日のトップニュースに載るかもしれない。

残り時間はあと2分ほどだが、いくらAFO最強でも残り2分で基地を壊滅させられる訳がない。

<Warning! Warning! Riding through the night!>

歌が聞こえる。

きつと誰かが戦勝祝いに盛り上がっているのだろうが、オープンチャネルで無意味に大声を出すのはマナー違反だ。

<Feel like burning in the artificial sun. Melt down!>

「こちらエコー、歌っているのは誰だ？」

着陸指示を受けられない。」

<Don't feel your minds melt down!>

「歌っているのは誰だ？今すぐ止めろ。」

<よう、エコー。ショウ…だったかなあ？>

どこからか見られている気配を感じた俺は一瞬身構える。

「…誰だ？」

<ふっふっふ…。ふはははははっ!!>

耳に響く気味の悪い笑い声を上げる。

<シヨウ君の授業料の取り立てに来ましたアアアア!

ついでに初回特典の核爆弾もお届けでええええす!!>

オープンチャンネルで放たれたひと単語に

全員が凍り付いた。

核

AFOで最も高額な課金アイテムで、

それを保有するのは最強クラン、マジ卍のクランマスターのみ。

『こちらバッテンタワー、レーダーに反応あり!』

巡航ミサイルだ!』

「マズイっ!!」「ダメ!間に合わない!」

すぐさまハイGターンで180度方向を変えようとした矢先に

俺のすぐ真下を超低空で飛ぶ物体が通り抜けた。

基地の防空システムもミサイルや対空砲で迎撃しようとするが、その弾幕を全て掻い潜って基地の中心に巡航ミサイルが達した。

夜明けの空、南の方角に太陽が生まれた。

「うわっ!!」「くっ!!」

ヘルメットのバイザー越しにもかかわらず

思わず目を覆うほどの爆発が起き、

基地周辺の密林の木々がかなりの範囲でなぎ倒された。

猛烈な衝撃波で全身を揺さぶられ、思わずバランスを崩しかける。

キノコ雲が空高く登る。

『こちらAWACS…。基地が完全に破壊された。
我々に帰る場所はもう無い。』

#5 灰の中から I

基地が文字通り灰になったのを目の前で見ていた俺とマリーは、シグレニ同盟のもう一つの基地であるサレドモ基地では無く、最寄りの公式ベースへと向かった。

シグレニ同盟のクランマスターと連絡を取るためだ。

「クビだ。二度と顔を見せるなこの疫病神め…。」

「は!?! 一体どういうことだよ!」

突然の契約解消に俺は声を荒らげる。

「マジ卍が宣言文を出した。」

どこかのバカがマジ卍のクランマスターを撃墜したそうだ。」

俺は顔から血の気が引くのを感じた。

V R空間でも血の気は引くらしい。

「それって…」

「お前のことだ！」

…向こうは我々の損失分を全て弁償した上で今回のことを不問にしてくれるようだが…。

こうでもしなければ私の腹の虫が治まらない…！」

悔しさのせいか今にも泣き出しそうな

克蘭マスターの顔を見ると、

彼が失ったものの大きさが身に染みる。

「…わかりました。」

今回はご迷惑をおかけしてすみませんでした…。」

無言で立ち去るシグレニ同盟の一行を見届けた俺は

さつきから背後でおかしな空気を漂わせているマリーの方を見た。

「…ぷ。ぷ。…」

「何笑ってんだよ…。」

見ればマリーは落ち込むどころか、今の会話の間中

ずっと笑いを堪えていたようだ。

「だって…シヨウが撃ち落としたりって自慢してきたB—I Bがあのトードだったってことでしょ…？」

「そうらしいな。」

「ぶふふふ…バカ過ぎる…！」

「つたく…、そこで好きなかだけ笑ってる。俺はまたフリーだ。」

「これでお前とも…ってお前何してんだよ!？」

一瞬目を離れた際にマリーはメニュー画面を開いて

シグレニ同盟に契約解除申請を送っていた。

「お前がまたどっかのクランマスターを撃ち落とさないように

私が見張つとく。」

「…あのなあ…。雇用主から解雇されたんだから

俺の評価は今、下がってるはずなんだぞ…？」

次の雇い主だなんてそう簡単に…」

メニュー画面を開いてプロフィールの評価を確認しようとする、

「やーっほっ!!」

突然何かが俺の背中に飛び乗った。

「その声、アンタは!!」

マリーの方は声だけで「何か」が何者か分かったらしいが、俺にはさっぱりわからない。

「誰だよ！てか放せっ!!」

首に巻かれた華奢な腕を掴んで思いつきり投げ飛ばすと、

「何か」は体操選手のような身のこなしで着地する。

「よっ!」

「何が『よっ!』だ!こっちは今失業中なんだよ!」

見た目幼女に自分の哀しい現実をぶつける大人げ無い姿が

公式ベースのホールに響き渡った。

周囲からの憐れみ100パーセント（濃縮還元）の視線が痛い。

「ていうかお前誰だ!」

「よくぞ聞いてくれた!我こそはマジ卍のカトラス!」

「雷神」の二つ名を持つ者だ!

空賊ども!我らの忠臣となれ!

ということとは目の前のこのちっさいのが

さっきのF-35ということになる。

俺はカトラスの目線の高さに合うように膝をつく。

「お前……何であの時、撃たなかった？」

「ん？」

カトラスはよくわからない、

といったような表情で首を傾げる。

「あ〜！アレね！なんかね、楽しかったから！

他の空賊は鈍いっていうか鈍臭いっていうか……」

「鈍くなかったら克蘭マスターなんて

撃ち落としてねえよ……」

「ぶいぶい……」

「そこ笑うな。」

ため息とともに立ち上がった俺は頭を搔く。

確かに雇ってもらえるに越したことはないが、

ついさつき戦った相手に雇われるというのは抵抗がある。

「んで、どーするのー！」

さつきからびよんびよんと落ち着きのないやつだが、

裏に何か隠してそうで怖い。あまり乗り気はしないが、

虎穴に入らずんば虎子を得ず、だ。

「報酬は？」

「えつとねー…」

メニュー画面を開いて何かを見ているカトラスは

何度かふむふむと頷く。

「無職よりずっと良いよ！」

そりやそうだ。

考えれば考えるほど選択肢が無い。

「マリーは？」

俺について来ると言ってくれた以上は

確認しないわけにもいかず、念のためマリーにも確認する。

「私たちは傭兵よ？」

だったら黙って金出す人について行きましょ。」

「じゃあ決まりだね！」

「ちよつと待て。」

俺の返事を待たずにメニュー画面を開こうとする

カトラスの手を止めさせる。

カトラスの方はどうして、と言いたげに首を傾げる。

ちくしょう可愛い顔しやがって。

「契約はする。ただし！仮契約だ。」

正式なメンバーじゃない。俺たちはあくまでも傭兵だ。」

「えーっ!!」

数分ほどギヤアギヤアと口論した後、

結局は俺の条件が通った。

カトラスはぶくーつと不満そうに頬を膨らませながらも

メニュー画面を開いて契約書を送ってきた。

俺とマリーは契約承認のボタンを押し、マジ卍に雇われた。

#6 灰の中から I I

「…ふう…。」

ようやくひと段落ついてフェアリーズからログアウトしたが、スクランブル発進してネームドのステルス機と渡り合つて

基地に核撃ち込まれてクビになったと思つたら

数分前まで戦つてたネームドに雇われるという、

1時間と少しの間起こつたとは思えないほど過密な出来事に俺の体内時計はおかしなことになっていた。

何はともあれ、部活をしていない学生の土曜日は暇でしようがない。1年生ともなれば尚更だ。

俺は中断された日常の続きを始めようと

もう一度タブレット端末をテレビに接続した。

朝からテレビの大画面でAFOの攻略情報を見たり、学校の課題を終わらせたり、

ハリウッド映画をして数時間過ごした俺だったが、

昼過ぎには暇を持て余すようになった。

やはりAFOの空を飛ぶ感覚が病みつきになってしまっている俺は

映画のようなテレビ画面では満たされない欲求を満たすべく、

リビングを片付けて再びアミუსフィアの元へ向かう。

しかし、元はと言えばこれが俺の日常であって

滅多な事がない限り朝からスクランブルなんてしない。

俺の活動時間は午後だ。

ベッドに潜り込んでアミウスフィアをかぶる。

「リンク・スタート」

目を開けると、そこはバツテン基地の格納庫……では無く、

マジ卍の密林エリアにあるニヨツテ基地の格納庫だ。

つい数時間前のことなのに数週間も前のことに感じられる。

バツテン基地を核の炎で更地にしてしまったことだけが記憶に新しい。

気持ち切り替えようと頭を振る。

気を紛らすためにグルリと周囲を見回すと、

格納庫はバツテン基地の数倍は広い。

しかもこれが1人のスペースというから驚きだ。

マジ卍では機体セットの複数持ちは当たり前なのだろうか？

メニュー画面から自由出撃を選ぼうと指を動かす俺は、

すんでのところでその指を止めた。

またどつかのクランマスターを撃ち落としては敵わない。

俺はクランから提供されるクランミツシヨンの画面に移る。

今回のマジ卍との空戦で色々試したい事ができたからだ。

「まずは…あつた。」

ローマニューバ・トレニングロー

先行する教官機を追跡し、そのマニューバを会得せよ。

カトラスとの空戦では同じ速度帯で戦っていたにも関わらず彼女の機動に翻弄され続けた。

つまり、裏を返せば速度が遅くてもテクニクがあればドッグファイトはなんとかなる可能性があるのだ。

空戦機動を磨ければドッグファイトに弱いF/A—18Fでも少しはマシになるだろう。

出撃準備を整え、出撃する。

格納庫から出ると、目の前の景色は朝のバツテン基地と大違いだった。

滑走路は見えるだけで4本あり、ズラリと並ぶ格納庫の向こうには公式ミツシヨンで見たことのあるレーザー兵器が空を見上げている。

『こちらニヨツテタワー、出撃申請を受領した。』

シヨウ…新入りか。まあ良い、2番を使用せよ。』

「こちらシヨウ、了解。」

格納庫から2番滑走路へと歩いていると、

別の滑走路に侵入してくる大型機が目にとまった。

ヨロヨロと不安定な飛び方をしている上に、

機体セットを身につけるプレイヤーには

GGOのようなゲームで見られるダメージエフェクトが見える。

『こちらニヨツテタワー、滑走路の全機に告ぐ。

友軍機が不時着する。退避せよ。』

何かまずい事が起きそうな気がする。

そんな予感にかられた俺はメニュー画面から

メニューバ・トレーニングの中止を選択し、

編隊を解いていないマリーの状態を見た。

今はこのニヨツテ基地の娯楽室に居るようだ。

俺は滑走路から駆け足で退避すると、

マリーにすぐ出撃するようメッセージを飛ばした。

何もなければ彼女に何か奢る羽目になるかもしれないが、

何かあった時困るよりは良いだろう。

疫病神の汚名はどこかで晴らさなければならぬ。

滑走路に侵入する大型機のプレイヤーはよろめきながらも

なんとか着地するが、完全に停止しきる前に

膝から崩れ落ち、滑走路と接した機体セットが火花を上げる。

「どうした？何があつた？」

背後から聞こえるマリリーの声からは戸惑いの色を感じる。

「わからない。ただ、大型機が不時着した。」

「こちらマリリー、ニヨツテタワー聞こえる？」

シヨウと出撃する。」

半ばゴリ押しで管制塔から出撃許可を取ったマリリーは

急かすように俺の背中を押して2番滑走路へと向かう。

滑走路に入るとすぐさまマリリーは走り出した。

俺も遅れぬよう走り出す。

ふわりと浮いた体を左に傾け、マリリーと編隊を組んだまま

ニヨツテ基地の上空を旋回して待機する。

数分も経たないうちに基地にサイレンが鳴り響き始めた。

メニユー画面のメールボックスには「非常召集」の文字がある。

添付されたブリーフィング動画を視界の隅に移して再生した。

画面には金髪の強面な男が映し出され、ただでさえ物騒な強面に眼帯までしている。

『諸君、突然の招集で申し訳ない。』

マジ卍のサブマスター、テルキスだ。

諸事情によりトードの代理として指揮を執る。

すでに知っていると思うが、

本日13時頃に我々の管制機が攻撃を受け、

ニヨツテ基地に不時着した。

今回我々に手を出した相手は先日のバカ者と違って

カーディナル・システムだ。

管制機はカーディナルが作成した新ミッションの

ミッションエリアに侵入したため、

Mobを刺激してしまつたと予測される。

いくら我々に手を出したと言っても相手がカーディナルでは手出しのしようがない。

そこで今回招集をかけた諸君には威力偵察を行つてもらう。

輸送機の飛行ルートを飛行し、ミッションエリアの範囲と

ミッションの開始条件を調査してもらおう。諸君の健闘を祈る。』

#7 Kill Zone I

『こちらはAWACSスカイアイ。』

これより作戦指示を行う。』

AWACSの管制が始まったということはミッシェンスタートだ。

しかし、後続の機体が上がってくる気配がない。

「ニヨツテタワー、作戦に参加する部隊を教えてください。」

『新入り2人だ。危ない仕事は得意だろ?』

「嵌められた。」

「そうだな。」

マリーがボソツと呟くがまさにその通りだと俺も思う。

しかしクランに危ない仕事を押し付けられるのは慣れている。

なんならマリーと組み始める前からやっていた。

タイミングが良すぎる気はするが、

やれと言われたら契約したのだからやるしかない。

今回、アルファ1とアルファ2をコールサインに貰った

俺とマリーは、AWACSとコールサインの確認をして指示通りのルートに進路を取った。

ニヨッテ基地から輸送機の飛行ルートを辿って数十分も飛ぶと、

真つ平らな密林地帯は形を変え、霧が立ち込める峡谷が姿を現した。

天気はあつという間に変わり、大雨が降り出す。

輸送機がこんなところを飛ばせばそれはもう奇襲し放題だと思いが、

それでもこのルートを使うからには何か意味があるのだろう。

俺とマリーはAWACSの指示通り峡谷の中に飛び込む。

『視界が悪い。』

マリーの言う通り、峡谷を数kmも飛ぶと

立ち込める霧と峡谷の淵から滝になって

流れ落ちる水の飛沫でまともに前が見えない。

それに加えてレーダーがさつきから乱れている。

「レーダーがおかしい…。アルファ2、そっちはどうだ？」
『さつきから画面が乱れてる。』

AFOに故障なんて概念は無いし、

2人のレーダーが同時におかしくなったとすると

バグでもない限り何か他に原因がありそうだ。

それはともかく、AFOのレーダーは地形も表示しているため、
視界が悪い上にレーダー兼マップもアテにならないとなれば
いつ岸壁に激突して墜落してもおかしくない。

プレイ歴2年以上のプレイヤー2人が揃いも揃って

墜落事故だなんて笑い話にしかない。

「高度を上げよう。」

『了解。』

輸送機と同じルートで峡谷の間を飛行していた俺は、

指定された輸送機のルートとは若干違うが、

事故を避けるためにマリーより先行して機首を上げた。

しかし、俺が峡谷の淵から頭を出すと同時に

HMDが通常の緑色から真っ赤に変わった。

『ミツシヨンエリアに侵入。』

シヨウ、ロックオンされている。』

A W A C S の棒読み管制が俺の H M D が真つ赤な理由を教えてくれるが、そんなことは言われなくてもわかつてる。

「クソ、ブレイク！」

峡谷の外は霧が薄いお陰で視界は良い方だが、

それでも雨のせいで視界は悪いままなので

俺をロックオンしている相手の位置が掴めない。

旋回して回避機動を取りながら索敵するが、

一向に相手は見つかからない。

『シヨウ！峡谷に戻って！』

「どこだ！わからない！」

峡谷を出てかなり回避機動を繰り返した俺は

自分かもといった峡谷を見失っていた。

加えて峡谷の外に出た時からレーダーも

完全に使えなくなっている。

「ジャミングだ！峡谷から出るな！」

『ミサイル接近。』

AWACSがミサイルの接近を伝えるとすぐに正面から向かってくるミサイルが目に入った。

すぐさまフレアを焚いた俺は高度を下げる。

1発目のミサイルは外れたが

ロックオンされたままの状況は変わらない。

『こちらテルキス。』

ミツシヨンエリアに侵入したようだな?』

「ミツシヨンエリアは範囲設定じゃない!高度設定だ!

高度600m以上で峡谷を飛ぶな!」

『了解した。貴重な情報をありがとう。』

「それだけかよ!」

テルキスとの交信に気を取られて

回避機動を疎かにした一瞬のうちにミサイルの警報が

再びなり始めた。周囲を見回すと今度は右から来ている。

「覚えてろよ!このクソ野郎っ!」

俺はミサイルが飛んできた右へハイGターンして躲す。

『こちらAWACSスカイアイ。』

敵のジャミング施設は峡谷のどこかにある。それを破壊せよ。』

きつとテルキスが新たな任務としてAWACSに

ジャミング施設の破壊司令を送ったのだろう。だが、

「できるかっつーの！」

こっちは回避で手一杯。マリーの方も霧の中で

手探り状態の飛行をしている。

前にも後ろにも進めないどん詰まりだ。

「こちらアルファー！敵の対空ミサイル攻撃が激しい！

撤退の許可を求めろ！」

『こちらテルキス。ミッション中断は認められない。

戦闘を継続し、ジャミング施設を破壊しろ。』

理不尽で無慈悲なテルキスの命令に続いて

AWACSからも無線が入る。

『こちらAWACSスカイアイ。』

当空域へ接近する所属不明機を確認。』

バッドニュースのダブルパンチに俺のメンタルは

ノックアウト寸前だが、あのムカつく金髪野郎が

基地で俺たちの状況を観てニヤけているかと思うと

そう簡単に堕ちてやる気はしない。

さらに接近するミサイルを躲した俺は

マリーの位置を知る方法を閃いた。

「アルファ2！機銃は使えるか？」

『使える。』

「上に向けて撃て！」

返事は返ってこなかったが、代わりに俺の前方に延びる峡谷から

一本の光の筋が空に昇った。

光っているのは弾道確認用の蛍光弾だ。

『どう？何かわかった？』

「ああ、わかった！俺はそっちの後ろを飛んでる！」

そのまま飛び続ける！」

『わかった。』

機首を下げて急降下した俺は霧の中に再び飛び込んだ。

相変わらずマップもレーダーも使えない状況だが、

ミサイルに狙われっぱなしというのは精神的にかなり辛い。狭い峡谷の中で飛ぶのも十分にキツイが、

こっちは進行方向にだけ注意すれば良い分、少しマシだ。

『アルファ一、生きてる?』

「ああ、奇跡的に。」

『5 kmくらい戻ったところで変な洞窟を見た。』

「…本当か?」

「洞窟」という単語に俺の思考は引っかけかけた。

というのも、A F Oの開発者の中には、

ナーヴギアやアミュスフィアがゲーム機の

代名詞となる以前のTVゲームで人気だった

エースコンバットシリーズのファンが居るのは

よく聞く話だからだ。

そしてそのエースコンバットシリーズでお約束と言っても良いほど

毎回のように入り込まれるシチュエーションが、

洞窟や地下施設、場合によっては砲身への突入だ。

人工衛星の中というのも聞いたことがある。

「よし、引き返そう。案内でできるか？」

『やってみる。』

そう、やってみる価値は十分にある。

#8 Kill Zone II

引き返すといっても車のように一時停止なんて芸当ができるのはカトラスのようなVTOL機だけなので、

宙返りする以外に方法はない。

しかし、敵機も近づいている今、

峡谷から出るのは出来るだけ避けたい。

そのために俺はまず出来るだけ高度を下げた。

深さ600m程度の峡谷の底は峡谷の至る所から流れ落ちる滝の水しぶきでさらに視界が悪い。

600mもあるならマリーは今の飛行速度でもハイGターンで余裕を持って180度回転できるが、

戦闘機では無いF/A-18Fは機動性に欠け、

視界の悪い峡谷ではハイGターンに必要な速度を稼げない。

かといって普通に減速して宙返りすると、

これまた旋回性能に劣る俺は失速して墜落する可能性がある。

ああすればこうなるといふ面倒な状況だ。どうして

こどもも足を引つ張つてばかりなのかと今更ながらに後悔する。

俺がいる限りマリーは一度峡谷から抜け出すまで飛行し続けるか、

敵に捕捉される前提で峡谷から出るかの二択しか無い。

「何か方法が…ハイGターン…急旋回…速力不足…」

『アルファ1、引き返す?』

「通常で速度で急旋回…?」

『は…?何?』

「そうだ…!」

苦肉の策だが、方法がないわけではない。

人間だから、このゲームだからこそできる方法がある!

「引き返すぞ!アルファ2、少しでも速度を上げるんだ。」

俺の合図でハイGターンをしてくれ。」

『わかった。そつちは?』

「お前に迎えに来てもらう。」

『……?』

「ハイGターンしたら腕を伸ばして飛んでくれ。」

『…オツケー』

俺はマリーとの距離を詰めると、

速度をギリギリまで落として機首を斜め上に

傾けた状態での飛行を始めた。

少しでも体勢を崩せば俺の体は揚力を失って

水面か岸壁のどちらかに激突する。

その間に通常で飛ぶマリーはドンドン離れて行く。

『いい？』

「良いぞー」

合図と同時に霧の向こうで宙返りするマリーの姿が

ボンヤリと見える。

2人の距離はあっという間に近づく。

「俺の腕を掴めっ!!」

俺はすれ違う寸前のところで体を横転させて腕を伸ばした。

無論、こんな低速度で機体を傾ければ機体は揚力を失って

降下するのだが、機体が横転すると同時に

俺の腕はマリーにしっかりと掴まれた。

「ーっ!!」

経験したことの無いGと腕が引きちぎれそうなほどの痛みに
並行して視界は俺の予想通りグルリと回転する。

「放せっ!」

エンジンの出力を上げると同時にそう叫んだ俺の腕は

マリリーの腕から離れ、気づけばマリリーと同じ方向に飛んでいる。

「…成功か…!?!」

『…痛い。お前重すぎ。』

「悪い…、これくらいしか思いつかなくてな…。」

とりあえず成功したようだ。

しかし今の「振り子」で機体にはかなりの負荷がかかったはずだ。

1番は2人とも利き手を使ってしまったが故に起こるであろう

右腕に装着された機銃のトラブルだ。

「機体チエック。」

『チエック…、機銃の照準がズレた。弁償して。』

「ホントにすまん。絶対弁償する。」

予測していただけに返事も即答だが、

俺の方も予想通り機銃にトラブルがある。

『そっちは?』

「機銃に異常はなし。」

でもベルトリンクとガイドレールが切れた。

2〜30発しか撃てない。」

『オツケー、それで? さっきの洞窟が何?』

そう、ここでようやくスタート地点だ。

ニヨツテ基地を離陸して30分ほどしか経っていない。

「俺の予想では洞窟を抜けた先に

ジャミング施設があるはずだ。」

『つてことは…』

マリーは何か気づいてしまった風のリアクションをする。

「洞窟に飛び込む。」

『死ねって言うの?』

例によって切れ味の鋭い即答だが、

2人も行く必要は無い。

「飛び込むのは俺だけだ。」

洞窟を抜けてジャミング施設を機銃で穴だらけにする。

アルファ2はジャミングが解除されたら対空戦だ。」

『でも機動性じゃ私の方が…』

マリーは俺の機動性のことを気にしているようだが、

AFOはそこまで厳しくは無い。

爆撃機でも使わない限りは大抵の機体が侵入できる程度の

洞窟になっっているのが普通のはずだ。

求められるのは繊細な操縦と一瞬で判断する決断力。

「アルファ2は空戦で不可欠だ。

これくらい俺にやらせろ。」

『…わかった。もうすぐ洞窟が見える。』

「了解。」

大見栄を張ったところまでは良かったが、

洞窟は峡谷の流れに対してほぼ90度になっっているように見える。

ろくに編隊も組めないこの峡谷の狭さでは

ハイGターンは必須だろう。

「それじゃあ行ってくる。」

マリーを追い越していると彼女は心配そうに

唇を「へ」の字に曲げている。

若干の加速を加え、タイミングを見計らってハイGターンをする。

俺の体は減速とともにスライディングの時のような

傾きかたをして方向を変える。洞窟の入り口が正面にきた。

「やっぱりな。」

俺の予想では正しかった。

洞窟はただの洞窟では無く、おそらくなにかの搬入口という

設定なのだろう。

コンテナ船でも通れそうなほどの広さの洞窟の壁面には

誘導灯が埋め込まれ、暗い洞窟の中で進路を示している。

失った分の速度を取り戻すためにスロットルを上げて

洞窟内に飛び込んだ。

#9 Kill Zone III

洞窟内は誘導灯が埋め込まれていると言ってもやはり暗すぎる。

俺は着陸用のライトを点灯させて少しでも視界を

確保しようとする。

まあ、ジェット戦闘機がせいぜい数十m先までしか

照らせないライトを使ったところで

突然現れる障害物を躲せるとはこれっぽっちも思っていないが、

衝突するにせよ、しないにせよ、

ぶつかる相手くらいは見えた方がいい。

洞窟に入って数秒もしていないが、心配してくれているのか

早速連絡が来た。

『まだ生きてる?』

しかし、冗談のつもりなのかかなり皮肉のこもった質問だ。

「残念ながらまだピンピンしてる。」

俺も向こうに合わせて少々皮肉っぽく答える。

『私の機体の修理代、忘れないでよ。』

言い方はやっぱりアレだが、とりあえず「墮ちるな」と言いたいということは俺にもしつかり伝わった。

俺も負けじと言り返す。

「あたり前だ。お前のポンコツミグの新調資金まで

稼いでやるよ。」

『やっぱいい。そのまま死ね。』

だが、自分の機体を悪く言われたのが癪に触ったようで、無線は切られた。

そして、つまらない言い合いをしているうちに

出口が目に入る。洞窟より少し明るい程度だが、

飛び出すと同時に俺は目の前に現れた巨大な物体に驚いた。

洞窟を抜けた場所は円形にくり抜いたような縦穴で、

キノコのような形をした金属製の巨大な構造物が

縦穴を覆い隠すようにそびえ立っている。

『アルファー、それがジャミング施設だ。機銃で破壊しろ。』

今更のようにAWACSが支持を出してくるが、

もとよりそのつもりだっただけに

俺は返事もせず右腕の機銃を構えて掃射する。

数十発の機関砲弾はあつという間になくなり、

キノコのような出で立ちのジャミング施設には

無数の弾痕が残されていた。

連続して鳴り響く射撃音が縦穴で反響し、

続いてジャミング施設に青白いスパークが発生する。

「やっべ……」

自爆する予兆のようなものを感じ取った俺が

キノコの傘の間をすり抜けて上空へ脱出しようとする

ジャミング施設の間隙から飛び出した瞬間に

一瞬だけロックオンされたことを告げる警報音とともに

HMDが真っ赤に照らされるが、

背後の派手な爆発音とともに通常の緑色に戻った。

直後にもすごい風圧が俺の背中を突き飛ばす。

「うおつと……危ねえ……」

危うくバランスを崩してしまふところだったが、

なんとか持ち堪える。

『アルファーが敵のジャミング施設を破壊。よくやった。』

A W A C S の戦果確認の無線と同時に視界の端で

スコアが追加される。

これで修理代は全て返せそうだ。

「ビヤツホーっ!!」

#10 Next to next I

『…生きていたか、シヨウ。』

プライベート回線で話しかけてきたのはテルキスだった。

どうやら俺はテルキスアレルギーになってしまったようで、

テルキスの声を聞いただけで耳の奥が痒い…気がする。

「ああ、生きてるさ。」

あなたの財布を空っぽにするまで死ねるかよ。」

『お前はマジでにふさわしくない。』

嫌味盛り盛りで言い返した俺にテルキスは「ふさわしくない」と言い放ったが、

それならそもそも雇わなければ良い。

それに、俺が嫌われているのと同じように俺もテルキスを嫌っている。

「奇遇だな。俺もあんたみたいな上司はふさわしくないって思ってたんだ。」

『…まあ良い。今は好きにしてろ。いずれは俺の手でお前を墜とす。』

ブチっという音とともに回線は切れ、

入れ替わるようにマリーが隣に並んで編隊を組む。

「次は？」

「敵機が来てたはずなんだが…。」

A W A C S、こちらアルファ1。敵機の位置を教えてください。」

『こちらA W A C Sスカイアイ。』

2機の敵機はそこから見て2時の方向にいるが、

先程からミツシヨンエリア周辺を周回するだけだ。』

敵機というなら攻撃したくなるが、触らぬ神に祟りなしとよく言う。

昆虫でさえ巢を突かなければ襲ってこない。

一旦、テルキスに支持を仰ぐべきだと思いが、

さっきの無線の後で話しかける気にはならない。

どうしたものかとリーダーをにらみながら考えていると、

コンタクトは向こうから来た。

オーブンチャンネルで何か話している。

<あー、あー、聞こえるかな？マジ卍の戦闘機。>

聞こえてきた生徒会長風のハリのある声に

俺とマリーは顔を見合わせる。

<こちらはケモノフスタン共和国軍だ。>

君たちは我々の勢力圏に大きく侵入している。

直ちに退去しなさい。さもなくば、宣戦布告とみなす。>

「…は？」

初っ端からきつい。普通は「さもなくば撃墜」だろう。

かなり自信のあるもの言いをするところからして

脅し半分と言ったところだろうか？

敵機というからミッション中に現れた新手の敵NPCと

思っていたのだが、相手がプレイヤーなら

うっかり撃ち墜とすとんでもないことになることは

身を以て知ったばかりだ。

さすがにテルキスに聞かないわけにはいかない。

「テルキス？」

『全て聞いている。』

だったら話は早い。説明の手間が省ける。

『撃墜しろ。』

「は。」

撃墜する、と脅された数秒後に撃墜しろ、と

命令されるといふ明らかに戦闘不可避な板挟み状態に俺は思わず素で聞き返してしまった。

『聞こえなかったか？その空域は我々マジ卍の勢力圏だ。

害獣は駆除しろ。』

「いや…」

受け取り難い命令に躊躇いの色を隠せないが、

そんな感情は警報音とともに掻き消された。

「ミサイル！」

マリーの警告を聞いてリーダーに視界を落とすと、

12発のミサイルが俺たちの方へ接近している。

「嘘だろ!?アルファ2、ブレイクだ！ブレイク！」

すぐに編隊を解いて回避行動を取るように指示し、

フレアを散布しながら俺たちは散開する。

12発のミサイルは俺とマリーに6発ずつ向かってくる。

俺はスロツトルを全開にし、一気に加速した。

ミサイルが1発、フレアにつられて

明後日の方向へ逸れる。残り5発。

「ーッ!!」

ハイGターンで機体の向きを大きく変えると、

さらに3発が雲の中に入った俺の姿を見失って迷走する。

「クソッ、どこ行った!?!」

しかし、俺も最後の1発を見失った。

警報音とHMDは後方からの接近を警告してくるが、

お互いに雲の中に居るため

残り1発のミサイルがどのタイミングで来るかわからない。

警報音が近くなる。

「ーッ!!」だー!

タイミングを見計らって体を捻った俺の目の前を

最後のミサイルが通り抜け…ずに爆発した。

「うぐっ…!アルファ1、被弾…!」

GGOのような被弾エフェクトが足にびっしりと貼り付き、

左腕に取り付けているモニターは

着陸装置が破損したことを示している。

『大丈夫…!?!』

「大丈夫だ、飛行に問題は無い。そっちは？」

『全部避けた。』

なんとなくわかつてはいたが、自分の技量の低さが身に染みる。

とりあえず、マリールと俺の特殊兵装が無事ならまだ戦える。

念のため兵装システムをチェックする。

異常のないことを確認した俺は、

スロットル全開で雲の中を一気に上昇した。

「ケモノフスタン共和国軍に告ぐ、

貴軍はマジ丑に対して不当な戦闘行為を行使している！

即刻中止せよ。」

少しでも時間を稼げればとオープンチャンネルで

ケモノフスタン共和国空軍とやらに呼びかけてみる。

しかし、返事をしたのはテルキスだった。

『何をしている、アルファー。交渉の必要はない。』

「向こうは宣戦布告を押し付けてるんだ！

「ここでもともとに相手をすれば言いがかりをつけられるぞ！」

『方針に変更は無い。敵は全て撃墜しろ。』

撤退は認められない。繰り返す、撤退は認められない。』

「危険手当と高所作業手当増し増しで請求してやる!」

三下のような無様なセリフを吐き捨てて

テルキスとの回線を切ると、指示を求めてマリイが

編隊の距離を縮める。

「どうする?」

「もう知ったことか、全部撃ち落とす!」

とは言うものの、機体性能で劣る俺は戦術で

優位を保つて来た。今回もまた然り。

俺はすぐに左腕のモニターを

A W A C S のレーダー情報とリンクさせて、

敵の飛行経路や行動パターンを含めた情報を自動解析させる。

単座機でこれをやろうとしてもそうはいかない。

A F O では1人のプレイヤーあたり1機の航空機を操縦するが、

パイロットが2人以上居る航空機（複座機）には

レーダー／火器管制士官の代わりに

それなりの情報処理能力があるコンピューターが与えられ、

それをどちらかの腕に巻き付けて使う仕組みなのだ。

複座機ならではの機能を存分に使って解析した情報によると、敵機は6 A A Mを運用できるファイターで、

その機動性からカナード翼機であることが推測できた。

「アルファ2、峡谷内を飛んで待ち伏せだ。」

俺が待ち伏せポイントまでおびき寄せる。」

『そしたら背後を取って一気に叩く。』

「その通り。」

毎度のように俺が言いたいことを理解して先読みする

優秀な僚機のお陰で、今回のような

立て続けに戦闘が怒る場面でも柔軟に

作戦を立てて対応できる。

俺は相棒の物分かりの良さに感謝しつつ、

編隊を解くよう指示を出した。

#11 Next to next II

マリーが峡谷に立ち込める霧の中へ姿を消したのを見送った俺は、レーダーにマリーが映っている事を確認して

雲の中から飛び出した。

向こうの1機は俺を待ち伏せしていたらしく、

かなり距離はあるが俺の正面をこちらに向けて飛んでいる。

途端、視界が真っ赤に照らされ、続いて正面から

ミサイルが何発も接近しているのがレーダーに映った。

俺の目にも敵機からこちらに伸びてくる6本の白煙が見える。

戦闘開始と同時に先手を打たれるとは予想外だったが、

俺はただの囷で、必ずしも攻撃を当てる必要はない。

回避行動を取りながらフレアをばら撒く。

6本のミサイルがそれぞれ迷走し始めるのを確認した俺は

もう1機の敵機を探す。

レーダーを見れば、かなり低空を飛んでいることがわかる。

「チツ…」

思わず舌打ちをした。

もう1機の敵機はレーダーに映るマリーの後方に迫っている。

峡谷の外から狙われたらまともに回避機動を取れないマリーは

良いマトだ。

俺は特殊兵装の4 A A Mに切り替えて

マリーの背後に迫る敵機にロックオンする。

しかし、その俺も背後からロックオンされると言う

あまり良くない状況になってしまう。

幸いなことに4 A A Mは誘導性が低い代わりに

撃ちつばなし機能が付いている。

俺は回避機動に移りつつ、4発のミサイルを一気に放った。

敵がマリーの追跡を中断して回避しようとする傍らで

俺も右へ左へとミサイルを躲す。

今回のミサイルは2発だけだったようで、

難なく2発のミサイルを躲した俺は反撃のために

スロットルを下げて機首を斜め上に上げる。

俺の体はわずかに緩やかに起き上がって螺旋状に一回転。

急減速に対応できずに俺を追い抜いた敵機の背中を捉えた。

バレルロールと呼ばれる技で、

普通なら機銃を使うが俺の機銃はもう使えない。

さつきと同じく4 A A Mでロックオンして4発を一気に撃つ。

「きやあつ!!」

機銃の射程内、無線なしでも声が届く距離で放たれたミサイルは

回避する隙すら与えずに敵機に喰らい付き、爆発した。

背中のエンジンや主翼を被弾エフエクトだらけにした敵機は

そのまま岩肌を晒す峡谷に落ちていく。

「1機撃墜。」

念のため、無線で報告した俺の耳にすぐさま返事が届く。

『え…?うそ…!?!』

「お前は俺をなんだと思ってんだ。」

『鈍チン』

「お前ちよつとミサイルかますから顔出せ。」

戦闘中ではあるがいつものように会話をしていた俺は、

高度を落として峡谷の霧に飲まれるギリギリを維持する。位置はマリーの頭上だ。

再びオーブンチャンネルで生徒会長的な女声が割り込む。<仲間を落としたようね。でも…まだ終わらないから。>

アラートが鳴る。ロックオンされた。背後からだ。

背後を見ると、太陽を背に上空から降下しながら俺に狙いを定めるタイフーンが見える。

「今だ、マリー！」

<何!?!>

突然のロックオンアラートに驚いた敵の挙動が

一瞬の隙を作った刹那、峡谷の霧を突き抜けて現れたマリーが機銃を連射する。

照準がズレているせいで初弾を外すが、

ホースで水を撒くように左右に機銃を振ると

数十発が敵プレイヤーの腹を食い破った。

エンジンから煙を吐きながら緩やかに滑空していく

敵機をよそに、マリーが俺の斜め後ろに着いて編隊を組む。

滑空しながら峡谷の中へ墜落していく敵機の周りを

旋回していると、再度オープンチャンネルで呼びかけられる。

<まだ：まだ終わらないわ。これは始まりに過ぎない。

また近いうちに会うでしょう。その時は必ず…>

峡谷の霧の中で爆発が起き、無線が途切れた。

「いや、終わりだ。」

無意識のうちにポツリと呟いた俺は、

ニヨツテ基地に進路をとる。

「これゲームだし、絶対再戦する。」

「おいおい…、今ので雰囲気ぶち壊しじゃねえか…。」

#12 Peaceful day

無事に生還したにも関わらず、テルキスに散々嫌味を言われ、基地に着陸するとすぐに

マリーから機銃の修理代をみっちり取られた挙句、

霧が立ち込める峽谷で長時間危険な飛行をさせた、と

危険手当の名目で手取りの4割近くを持っていかれた俺は

機銃の破損した部分のパーツを購入し、

格納庫で1人寂しく機銃の修理をしていた。

無論、こんな事をしなくても修理費をクランに払えば

勝手に修理してもらえる。

しかし、その中にはクランに納める分も含まれているため、今回のようにいくつかのパーツを交換して終わるようなら自分でやった方が安上がりだ。

「あつれー？誰かと思えばウワサの新入りくんじゃーん！」

なにか聞き覚えのない声に呼ばれて振り返ると

そこにはどこかで見た気のする女性プレイヤーが

月明かりを背景に格納庫のドアに背を預けて立っていた。

「はあ…また冷やかしですか。」

帰還してからテルキスと30分近く口論をしていた俺は、格納庫に向かう途中、トードを撃墜した件で

マジ卍のメンバーから冷やかしを受けていたため、

格納庫に籠もったのだが、どうやら戸締りをし忘れたらしい。

「聞かせてよ、トードを撃ち落とした話！」

「自分、今は忙しいので。」

冷たくあしらって端末を操作し、格納庫のドアを閉める。

「できれば戦闘ログも観たいなー、…よつと…。」

あぶないあぶない。」

彼女はそれでも閉まる扉の間をすり抜けて

格納庫に入ってきた。

「ねえねえ！アイツどんな顔して墜ちたの？」

何か小悪魔的な雰囲気纏わせながらメガネをクイツと上げた彼女からは知的な印象と同時に何か危ないことに

巻き込まれそうな気がする。

「知りませんよ、そんなの。」

俺はメニュー画面からフリーフライトを選択して

管制塔に離陸許可を求める。

「それじゃあ、一緒に来たあの娘は？彼女？」

「うっ…」

心臓から通常の1.5倍くらいの血液が押し出されたような

感覚とともに俺は足を止めた。

動揺しているのが自分でもわかる。

しかし、動揺するほどの答えを俺が

持っていないことにも気づいた。

「…ただの腐れ縁ですよ。」

あいつが1番飛びやすいだけです。」

振り向きもせず回答した俺は格納庫の出口に向かう。

「へえ…、それには答えてくれるんだ…。」

じゃあ、もうひとつ質問。」

彼女は後ろから軽快な足取りで俺の後ろをついてくる。

「何ですか…。」

「あの娘より飛びやすい娘がいたら代わってくれる？」

「どうとでも解釈できる質問だったが、

そんな質問はさつきよりも簡単だ。

「答えなんて脊髄反射で出てくる。」

「ありえないっすね。」

「おっ、即答。」

少し感心したような表情で俺を見る彼女は

さらに口を開きかけるが、

『「こちらニヨツテタワー。シヨウ、離陸を許可する。」』

「いいタイミングで無線が入った。」

「シヨウ、了解。それじゃあ、失礼します。」

「またね。」

滑走路を走り出した俺を彼女が追ってくることはなく、

そのまま離陸した俺を滑走路から手を振って見送っている。

「不思議な人だなあ…。」

無数の標的が現れるフリーフライトで機銃の動作や

照準にズレが無いかを確認しながら30分ほどの

夜間飛行を終えた俺は、ニヨツテ基地の滑走路に降り立った。

格納庫へ向かっていると、

入り口にはさっきの女性プレイヤーが立っている。

「自己紹介してなかったね。私はカールターナー。」

何語かも不明な名前だが、これで女性プレイヤーXの

固有名詞ができた。

「シヨウです。」

俺も形式的に返して会釈し、格納庫に入る。

「釣れないな。」

女の子にはもつと優しくしてあげた方が良いよ。」

「優しさでミサイルを躲せるなら検討します。」

「へえー、そう来たか…。」

格納庫の中までツカツカとついて来たカールターナーは俺が機体セットを解除する傍らで作業台に腰を下ろす。

それでも彼女の長い脚は長さを持って余しているようで、欧米人のように脚を組む。

「君は戦闘中によく指示を飛ばすみたいね。」

「それが何か？」

「ううん、私が飛べない間は頼りにできそうだなーって

思っただけ。」

「…飛べない…？」

「あ、知らないか。私、今日の昼頃に墜落したの。」

あー、でもあれは不時着…んー…。」

昼頃と言えばあの被弾した大型機だろうか？

確かに思い返してみれば操縦していたプレイヤーは

カールターナーだったような気がする。

「それはともかく。」

カールターナーは作業台から立ち上がってメニュー画面を開く。

「E/A—18Gって知ってる?」

E/A—18Gといえば、

F/A—18Fを基に設計された電子戦支援機で、

AFOでの分類はマルチロール機だが、

特殊兵装が電子支援ポッドや電子攻撃ポッドと

サポート系ばかりなので毛嫌いされている機体だ。

「知ってはいまずけど…」

「私が復帰するまでの間、それに乗ってくれないかな。」

「どういうことですか?」

カールターナーさんの機体は何なんですか?」

カールターナーは「そういえば言っただけだったか」と

一人で納得すると、

メニュー画面から機体セットの画面を呼び出す。

「私の機体はE—767早期警戒管制機。」

「なっ…」

言葉も出ない。

E—767と言えばAFO内では3千クレジット。

リアルマネーでいう30万円もする機体だ。

当然、その分だけ性能も高く、

普通ならAIのAWACSに任せる部隊の指揮や

敵レーダーへのジャミング、データリンクの範囲拡大など、
使い次第では戦況を覆せる。

ただ、それ故にリアルマネーで30万円もする訳で、

カールターナーのように撃墜されたりすると

修理で数週間は飛べないだろう。

「だからお願い。」

「…事情はわかりましたけど…。」

俺、今は新しい機体を買うほどのクレジットを

持ってませんよ。」

「金ならあるわ。」

俺の事情などとつくに知っているかのような動作で

俺が喋り終える前からメニュー画面を操作していた

カールターナーは、1つのブリーフケースを実体化させる。

作業台の上で開けられたケースの中には大量の札束が

敷き詰められていた。

「これで足りるでしょう?」

「足りるも何も…」

ケースの中にはざつと5万クレジットはあり、

これだけあればE/A-18Gが2機買える。

「多すぎですよ。」

「釣りはとっておいて。」

なんとも頼もしいお言葉だが、俺だつて長いこと

傭兵をやっている。金の出所を聞かないとヤバイ。

「カールターナーさん、このお金はどこから?」

「え…」

「まさか人のお金とかじゃ無いですよね?」

「ん…:そんなわけ無いよ。」

カールターナーの表情が曇る。

「言わないとこつちも機体は変えませぬ。」

「実は…」

ゴニョゴニョと事情を聞いてみると、

横領などでは無く、電子戦支援をできる機体が居ない間のツナギをしてくれるメンバーを探してこいとの指令とともに、トードから押し付けられたらしい。

要は尻拭いだ。

それで正規メンバーは誰も引き受けてくれず、

途方にくれているところで俺を見つけたそうなの。

「でも俺、仮契約の傭兵ですよ？」

いつ敵になるかもわからないのに……」

「その時はその時！」

シヨウくん、君しか居ないんだよ！」

俺の両手を握り、高い身長を低くしてその上での上目遣い。

俺は止むを得ず首を縦に振った。

#13 Front line I

数日後。

新しく購入した：もとい、購入させられたE/A-18Gに慣れるためにフリーフライトやミッションをこなした俺は、数日ぶりにマリーと同じ時間帯にログインした。

：と言っても、お互いにスクランブル待機で

ログインしただけで特にすることもなかったため、娯楽室でポップコーン片手に戦争映画を見ていた。

無論、戦闘機が出てくるやつだ。

「これ、今度やってみよう。」

マリーは主人公がミサイルの爆炎を目くらましに

エイリアンの戦闘機を峽谷の壁に激突させるシーンで

そう呟く。

「やめとけよ。」

確かにマリーならできるかもしれないが、

それを習得するために練習に付き合わされるのは御免だ。

「つていうか、今の機体はシヨウと一緒。」

「違う。あれはF/A-118のA型かC型で単座型。

俺のはF/A-118Fで複座型だ。」

「…1人じゃん。」

「やめとけ。それ以上は言うな。」

AFOだけでなくエースコンバットの禁忌に

なんのためらいもなく触れるマリーを黙らせる。

マリーの視線はスクリーンに戻る。

「あ、脱出した。シヨウと同じ機体。」

「縁起でも無いこと言うな。」

ビーツ ビーツ ビーツ

スクランブルを要請するブザーが鳴り響く。

「良いところだったのに…」

先に娯楽室を出た俺はなかなか出てこないマリーを見る。

あからさまに落ち込むマリーは名残惜しそうにポップコーンを見つめた後、誰も見ていないことを確認して驚掴みにすると、そのまま口に頬張って娯楽室を出てきた。

「……。」

返す言葉もない。

俺は娯楽室の入り口にあるゴミ箱を掴むと、

マリーの前に突き出す。

「ほら、出せ。」

マリーはふるふると首を横に振る。

「みつともないぞ。」

食い意地を張るマリーはこの間に少しでも食べてしまおうと口を動かしている。

「こちらシヨウ。ニヨツテタワー、離陸許可を求む。」

『こちらニヨツテタワー、確認。』

シヨウ、後続の機体は誰だ?』

「…マリーだ。諸事情であと数分は喋れない。」

『…?りよ…了解、離陸を許可する。』

呆れた視線をマリーに向けてみるが、

マリーは未だに口をもぐもぐと動かしながら

真顔で親指を立ててみせる。何が“グツジヨブ”だ。

離陸するとすぐにAWACSからの通信が入る。

『こちらAWACSスカイアイ。作戦指示を行う。』

現在我々マジ卍は所属不明機からの領空侵犯を受けている。すでに先行した天使隊エンジェルズが交戦しているが、

通信環境が不安定だ。

先日破壊したジャミング施設の影響と思われる。

シヨウは搭載したESMにて当該空域中の友軍を支援し、

マリーはそれを護衛し、

前線を突破した所属不明機を発見した場合は

各個撃破せよ。』

つまり、間接的ながらも自分の尻拭いというわけか…。

なかなか思うところはあるが、

だからこそしっかり戦果を上げなければならない。

アルファ1のコールサインを与えられた俺は、

アルファ2のコールサインを与えられたマリーとともに

数日前にジャミング施設を破壊したあの峡谷に向かう。

数分もしないうちにレーダーが敵機と友軍機を捉えた。

友軍機は2機で、対する敵は5：いや、もつといるが、

劣勢というよりは相手を弄んでいるように見える。

「こちらマジ卍所属のアルファ隊だ。

エンジェルズ
天使隊、通信支援に入る。」

同士討ちを避けるために友軍の接近を告げる一報を入れると、通信する余裕すら無きような機動で飛んでいるにも関わらず

涼しげな声が聞こえてきた。

《こちらエンジェルズなの！》

《手出しむようなの！》

幼女の声が。

『アルファー、今の…』

「あ…、お前も聞こえたか？」

やはり俺の無意識の性癖が姿を現わす兆候では無かつたらしい。

「幼女だったな。」「双子だった。』

訂正、まさかここで食い違うとは思わなかった。

確かに声が似ているような気もしたが、

それよりも驚くべきはAFOに幼女が興味を持ったことだろう。

これで日本の空は安泰だ。

『ロリコン。』

「やめろ、人聞きの悪い。」

#14 Front line II

「双子ちゃんだったのか…。」

双子と言えば以心伝心するのかなんとか

都市伝説からガチまでいろんな話があるが、

実際はどうなのだろうか？

学校で先生を困惑させたりしてイタズラするのだろうか？

だったら無線は要らないけど、

アミユスフィアを介しても同じことが言えるのか？

なにやらオカルト的な方面へ思考が傾き始めた時、

目の前を人影が横切った。

「あつぶねえっ!?!」

『起きた?』

もちろん横切った犯人はマリーだ。

「起きてるっての!」

『顔が寝てた。』

確かに俺は考え事をするときに目を瞑るが寝てはいない。

「考え事だ。」

『エツチな?』

「ちげえよ。」

誰がガキ相手におっ立てるか。

血の一滴も回らねえ。

『シヨウも年頃の男の子。』

それは否定できない。

「お前なあ…俺のリアル知らねえだろ。」

この流れで普段の会話をしているとなるとマリーの事が

心配になってくるが、

『知ってる。妻子持ちのくせに浮気するオッサン。』

「するか! つーかまだ学s…違うっ!!」

心配すべきは自分の事だったようだ。

『シヨウは学生か。』

「やめろ。今すぐ記憶から消せ。」

《《こちらエンジェルスなの!》》《《なの!》》

俺とマリリーの雑談を遮るように前線の2人から無線が入る。

「こちらアルファ一、どうぞで。」

《様子が変なの！》

「変って何が…」

そこまで言いかけたところで俺の視界に峡谷の中を進む

魚の群れのように黒い影が目に残まる。

「マリリー、あれは…」

俺が指差した方向を見るや否や、

その影は一気に峡谷の霧を突き破って姿を現した。

10機ほどのタイフーンだ。

『ブレイク！』

流星にまじいと思っただのか、俺より先にマリリーが

指示を出して俺たちは編隊を解く。

＜数日ぶりかしら？＞

言っただでしょう、まだ終わっていないって。＞

アイツだ。数日前の…

「マリリー、敵機が抜けてきたら？」

『墜とす。』

「そうだ。行つていいぞ。」

今回の俺の機体はE/A-18Gで特殊兵装にミサイルを積んでいない。

つまり、ただの足手まといだ。

そんな俺の援護を頼りに飛ばせるくらいなら

マリーは1人で飛んだ方が強い。

俺は1対1に強いマリーに敵機を寄せ付けまいと

手当たり次第に通常ミサイルを撃つては逃げる。

ESM、正式名称を電子支援ポッドという特殊兵装が

友軍機とのデータリンクの有効範囲を広げたり、

その効果を上げてくれたお陰で

何発かは命中してダメージを与えた。

あとは逃げるだけだ。

相変わらず空を覆う雨雲に突つ込むと、

バイザーには大量の水滴が降りかかる。

背後を見ると、6機ほどのタイフーンに後を追われている。

直後、数え切れないほどのアラートが鳴った。

6機全てにロックオンされている。

「そりゃオーバーキルだつて!!」

悲鳴混じりで悪態をついた俺はそのまま急降下で

ミサイルから逃げた。

逃げる先は無論、峡谷だが、こんな霧の中に飛び込んで

無事で居られる訳がない。

俺は峡谷の霧の中に体を半分埋めるほどの高度に

下がるとありつたけのフレアを撒いた。

俺のエンジンから出る空気は霧の水分と混ざって

冷却され、熱追尾式のミサイルの目からは

見えなくなるはずだからだ。

予想通りミサイル十数発を全て霧の中へと放り込んだ。

反撃に転じようとする俺の背後を

さっきの敵のうち4機が付いてくる。

なんとか振り払おうと右へ左へ急旋回を繰り返す。

しかし、マルチロール機が戦闘機相手に機動性で

勝てるはずも無く、振り切るどころかさらに2機が

加わっていた。

ロックオンアラートが鳴っては静まるのを

繰り返しているうちに背後の6機との距離が近づく。

さつきから機銃の弾が俺の機体を掠めている。

峡谷の外は平坦な地形で、隠れられる場所はない。

下に目を向けた俺は霧のかかった峡谷を見て舌打ちする。

出撃前に見ていた映画を思い出したからだ。

「まさか俺が…、チクシヨウツー！」

どうせ逃げ惑って撃ち落とされるくらいなら

最大限相手をてこずらせてやろう。

そう覚悟を決めた俺は一度上昇する機動を見せて

フェイントをかけると一気に峡谷へ急降下した。

数瞬間の感覚を開けて敵も後に続く。

霧のせいで視界は最悪だが、それをギリギリのタイミングで

見極めながら飛び、最初の急カーブに差し掛かったところで

俺は通常ミサイルを無誘導で発射した。

ミサイルは峡谷の壁に命中して巨大な落石を発生させる。

「きゃあつ!？」

背後で数名の悲鳴が聞こえたかと思うと

爆発音が峡谷に木霊した。

反響して何度も爆発音が響くせいで正確に墜落した敵機の数はわからないが、少なくとも1機は落ちた。

初めてにしてはなかなか上手くできたが、

今の攻撃は「撃てば自分たちも危ない」という

相手へのプレッシャーでもある。

それが少しは効いたようで、さつきから

何度も峡谷の狭くなっている場所を通り抜けたが

ロックオンされたとしてもミサイルが飛んでこないし、

俺と距離を取っているからか機銃も当たらない。

「どうすんだこれ…。」

思ったより相手が賢かったせいで

落石攻撃はたった1回で通用しなくなるし、

かと言って峡谷から出てもさつきと同じだ。

マンネリ化してしまった。ゲームをやっつけて

最もつまらないパターンのもつだろう。

お互いの操縦ミスを狙って俺は落石攻撃、

敵はロックオンと機銃攻撃でのプレッシャー。

お互いに決め手に欠ける。

何か手は無いかと考えながらも一度落石攻撃を

仕掛けようとした時だった。

《新入りさんに加勢するの！》《なの！》

双子の声が無線に割り込んできた。

俺のデータリンクの範囲内に双子が接近して

お互いのレーダー情報が共有され、

レーダー画面に背後の4機が映し出される。

その直後、

《アハハハハハハっ!!》

幼女の甲高い笑い声がオープンチャンネルで響いたかと思うと

敵機を表す反応が1つ、レーダーから消えた。

《私も!》

《機銃が良い? ミサイルが良い?》

どっちもやっちゃおうか!!」

あつという間に2機がレーダーから消え、

残る1機は峡谷を飛び出してアフターバーナーを使いながら

俺の頭上を飛んで行った。

《逃がさないよー!アハハハハっ!!》

背筋も凍るような不気味な笑い声が8発の

ミサイルとともに逃走する敵機に喰らい付き、爆散した。

「なんだありや…」

『当該空域からの全敵勢力排除を確認。』

天使隊、アルファ隊は帰投せよ。』

A W A C Sからの指示で空域の安全を確認できた俺は

峡谷を出ると、マリーと合流して編隊を組んだ。

前方には件の天使隊エンジェルズが飛んでいる。

俺は無線の回線をマリーとのプライベート回線に切り替えた。

『どうした?』

「いや、なんていうか…。」

『あの双子?』

「ああ、まあな。なんていうか…怖い。」

『私も。同じ空は飛びたく無い。』

「…そうだな。本音を言えば俺もだ。」

#15 Surprised I

密林エリアでの防空戦から数日。

学生である俺は平日の午後から

スクランブル待機のシフトに入って出撃を繰り返すうちに、
これまで敬遠してきた近距離でのドッグファイトも

カナード翼機相手に連戦しているうちに人並みには

上達したと思う。

そして迎えた週末。

金曜日の深夜にメールで呼び出された俺は

ログアウトしたらそのまま寝られるように寝支度を整えて

ログインした。

格納庫にスポーンすると、すぐさまブリーフィング画面に

視界が切り替えられてブリーフィングビデオがスタートした。

『諸君、夜分遅くにすまない。』

知っての通り、我々マジ卍はケモノフスタンなどという

変質者ども相手に防戦を強いられてきたが、

この週末を使って攻勢に転じる。』

画面は密林エリアのホログラフィックマップに切り替わり、どこかの基地が映し出された。

『その第一段階として、まず敵の航空基地を叩き潰す。

攻撃目標は我々と同じ密林エリアに位置するワレラ基地。とあるバカのクランマスター撃墜騒ぎが原因で

シグレニ同盟との戦闘で核を使ったため、

今回は我々のダイレクトアタックが必要となる。』

マップの隅に青色の味方を表す光点が浮かび、

部隊名も共に表示される。

『無論、敵は対空兵器を多数配備していると思われるため、

妨害用に電子戦機も必要だが、

カールターナーは現在撃墜ペナルティで出撃不能だ。』

画面が再びワレラ基地に戻り、

基地の滑走路周辺に対空兵器を表す光点が

無数に表示された。

『そこで、今回も貴様ら傭兵に白羽の矢が立った。

シヨウ、貴様は今回ブラヴオーのコールサインを使って

E/A-18Gで出撃し、電子攻撃ホツドE/C/Mで

敵の対空攻撃を妨害しろ。』

俺を表す光点がワレラ基地の上空を旋回しながら

妨害電波を発し続けるイメージが映し出される。

『貴様の今回の作戦への参加は

カールターナーの推薦あつてのことだ。

そこを勘違いするな。疫病神。』

「チツ……。何が疫病神だ。」

舌打ちして文句を言いながらもE/A-18Gで

出撃準備を整えた俺は格納庫の外でマリーと落ち合った。

「おっかない名前つけられたな。」

「欲しいならくれてやるぞ。」

「ダサいからいい。」

挨拶がわりに軽口を叩き合いながら管制塔に離陸許可を

申請した俺たちは、滑走路へ向かう攻撃隊の列に加わって

離陸の順番を待つ。

「やーっほー！」

後ろから突然飛びかかれた俺は

思わずよろめくがなんとか踏ん張る。

こんなに元気のいいやつは一人しか居ない。

「久しぶり！シヨウ！久しぶり！マリーー！」

「つたく…。脅かすなよ。」

「久しぶり。カトラス。」

背中のカトラスを滑走路に降ろしながらその機体セットを見ると、

翼にパイロンが追加されて4

4 目標マルチロクオン空対地ミサイル
A G Mが

ぶら下げられていた。

普通、ミサイルは全て機体内部に格納するのだが、

今回の攻撃はステルス性無視で行くようだ。

マリーとカトラスが乙女話に華を咲かせている間に

今回の飛行ルートを確認していると、

ようやく俺たちの番が回ってきた。

『こちらニヨツテタワー。ブラヴオー隊、離陸を許可する。』

合図とともに俺とマリーが離陸を始める。

体がふわりと浮いて高度を上げた時だ。

基地に向かって超低空で飛行する機影が俺の目にとまる。

「こちらブラヴオー、ニヨツテタワー。」

基地へ向けて超低空飛行する機影を2機確認した。

あれは友軍機か？」

『こちらタワー、レーダーでは機影を確認できない。』

管制塔は半信半疑な声色だが、それは一瞬で変わった。

低空飛行する2機から4本の白い航跡が伸びて行き、

基地の上空を通過した直後に基地で大量の爆竹に

火をつけたかのような爆発が起きた。

『敵機だ！』

基地は大混乱に陥る。

何せ今から奇襲を仕掛けるはずの自分たちが
奇襲を受けたのだ。無理も無い。

<どこから来たんだ!?!>

<対空レーザーがやられたぞ!>

基地から発せられる被害報告を背に基地の上空を

通過した敵機は旋回して再び攻撃態勢に入る。

「ちよつと行つてくる。」

「あつ、待てー!」

あまりの混乱っぷりに見兼ねたマリーは

敵機に向かって急降下して行く。

続く俺も敵機に機首を向け、特殊兵装のECMを起動した。

敵機の機動が一瞬戸惑う。

どうやら特殊兵装のロックオンが出来なかつたことに

驚いたのだろう。

その隙を突くようにマリーは特殊兵装の

超高速対空ミサイル
H V A A を発射し、

先行していた1機を墜とした。

フレアを使って回避したもう1機がマリーの機銃の弾幕を掻い潜って俺に向かってくる。ヘッドオンの状態だ。

俺は向こうにロックオンされると

同時にもう一度ECMを起動した。

俺の視界を赤く照らすロックオンアラートは鳴りを潜め、

敵機が慌てて機銃を構える姿が見える。

俺は構わず通常ミサイルでロックオンし、2発発射した。

回避しようと機首を上げる敵プレイヤーの横っ腹で

ミサイルは爆発し、敵プレイヤーの体を文字通り引き裂いた。

被弾エフェクトのポリゴンが血飛沫のように

あたりに飛び散って消える。

「こちらブラヴオー隊、敵機2機を撃墜。

そちらの被害は？」

旋回しながらあちこちで黒煙が上がる基地を見下ろす。

管制塔からの返事は無い。

「管制塔、聞こえるか？」

『シヨウ、無駄。』

マリーの声で通信を辞めた俺は、マリーが指差す方向を見た。ついさつきまで管制塔だった鉄筋コンクリート製のタワーは根元からへし折れ、ガレキの山と化している。

「……。」

言葉を失ったまま滑走路へ視線を移すと、

まだ離陸出来ずに駐機していた友軍機があちこちで被弾エフエクトを煌めかせていた。

一部はもう離陸出来ないほどの損傷を受けているように見える。

『…える？上空のマジン機、聞こえる？』

「こちらブラヴオー、そちらは？」

『カールターナーよ。そっちは傭兵くんね？』

マリーからジト目を向けられる。

いかにも「あの女は誰？」と聞きたそうな表情だ。

『管制塔が破壊され、テルキス死亡。』

ただ今を持って私が指揮を引き継ぎます。

各機、機体状況をチェックしたのち、報告を。』

#16 Surprised II

各部隊が損害の報告を終え、カールターナーが数分沈黙した。

その沈黙が何を意味するかは判らないが、

状況が良く無いことくらいは俺にでもわかる。

ローピコン

メッセージを受信した。

俺だけでなく上空を旋回しているプレイヤーや

滑走路で待機しているプレイヤーも全員が同じように

メニュー画面を操作している。

俺もそれに倣ってメッセージを開くと、

ついさつき見たブリーフィングビデオと同じような

ホログラフィックマップが映し出された。

『状況を説明します。』

先ほどの敵機の奇襲で我々は基地の防空設備と、

滑走路で待機していた主力攻撃部隊に大きな被害を受けました。

単刀直入に言うところの状況で作戦を遂行するのは困難です。しかし、この機を逃せば我々は来週まで再び防戦を強いられるでしょう。

困難を承知の上で決断します。∴作戦は続行です。』

「マジかよ……。」

別にマジ卍の戦力を過小評価しているわけでは無いが、過大評価してもこの状況からの作戦遂行は厳しい。

『当初の作戦計画を変更し、

ブラヴオー、あなたにも対地攻撃に加わってもらいます。

ECMでミサイルを躲しつつ、

天使隊とブラヴオー隊を率いて敵基地に突入。

地对空ミサイルを全て破壊してください。

無理を承知の上でのお願いです。』

「はあ……。何で俺が飛ぶ時に限ってこうトラブルばかり……」

『地对空ミサイルを破壊し終えたのちに

残存戦力とユエニ基地からの増援でワレラ基地の機能を

徹底的に破壊します。

以上、諸君の健闘を祈ります。』

優しいお姉さんボイスと裏腹にかなり重要な任務を

押し付けられた俺は、早速指示通りに

天使隊と合流してワレラ基地を目指す。

よりによってあの双子とだ。

しかも天使隊の双子とマリーの3人をどういう風の吹き回しか

俺が指揮することになってしまった。

『新入りさんよろしくなの！』

合流するやあの怖い双子の挨拶にビビった俺は

思わず苦笑いで返す。

『メティ、この人は新入りさんじゃ無いの！』

隊長さんって呼ぶの！』

『わかったの！』

さすが双子というべきか、声まで同じに聞こえる。

『隊長さん、よろしくなの！』

「えつと…、よろしく…。」

見事にハモった双子の挨拶でタジタジとなった俺に、

今度はマリーからの無線が入る。

『ブラヴオー、顔。』

「うるさい！」

ケモノフスタンのワレラ基地までの道中、

敵がレーダーに引つかからないよう超低空飛行で

ニヨツテ基地に接近してきたことを思い返していた俺は、

そのまんま返しをしてやるために

3人に高度150m以下の超低空飛行と、無線封鎖を支持した。

それでも喋りたがりな双子は声が届く距離まで

編隊の距離を狭めて話していたが。

地上スレスレの高度で飛行すること30分ほど。

なかなかの高ストレス環境にリアルの俺の体は

汗びっしょりだろう。シーツの洗濯を考えると頭が痛い
が、今はこの時を楽しもう、と

低空飛行の維持に神経を研ぎ澄ませる。

レーダーを見ればあと1分でミサイルの射程内。

地平線の向こうにはワレラ基地のものらしきアンテナが見える。

「こちらブラヴオー1、無線封鎖解除。

これよりワレラ基地を奇襲する。

天使隊は敵戦闘機を優先的に排除。

ブラヴオー2は俺の直掩を頼む。」

『『了解なの!』』

『わかった。』

機首を上げた俺はワレラ基地を見下ろした。

ログインしている人数が少ないのか、

滑走路に敵機はあまりいない。

《こちらワレラタワー、接近中の機体、聞こえますか？

所属を明らかにしてください。》

どうやら向こうはまだ敵だと気づいていないようだ。

俺は管制塔をロックオンすると、最初の1発を放った。

《えっ!?! ウソ! てっkー》

管制塔のプレイヤーは最後まで

話し終える事なく吹き飛んだ。

《なに今の!?!》

《敵機! 敵機よ!》

奇襲は成功だ。

しかし相手の対応は早く、対空砲はすでに動き出し、

射撃管制レーダーにさっきから狙われている。

地对空ミサイルに狙われるのも時間の問題だ。

「こちらブラヴオー。奇襲は成功。」

繰り返す、奇襲は成功だ。」

『こちらコールターナー、了解。』

主力攻撃部隊到着までに敵防空設備の半数以上を

無力化してください。』

さらっと制限時間まで追加された俺は

返事もせずECMを起動した。

するとさつきまで鳴り響いていたロックオンアラートが嘘のように静まり返り、

俺たちを捉えきれていない対空砲が四方八方に

デタラメに撃ちまくっている。

俺は作戦通りに地対空ミサイルをロックオンして

片っ端から破壊していく。

ECMがリチャージのために停止すると

再びロックオンされるので回避行動を取って時間を稼ぎ、

ECMの準備が終わるともう一度起動。

そして対空兵器の破壊。

数回も繰り返すうちに最初の対空砲火が懐かしく思えるほど

ワレラ基地は静かになった。

離陸しようとする迎撃機や、逃げようとする機体も

3人が徹底的に破壊し尽くし、

ワレラ基地は戦闘開始から僅か15分ほどで完全に沈黙した。

「こちらブラヴオー1。」

「カールトターナー、聞こえるか？」

『こちらカールトターナー、どうぞ。』

「ワレラ基地の防空設備、および航空機を全て破壊。

ワレラ基地の無力化を完了した。」

『了解。』

それではこれから攻撃部隊を……え？」

「カールトターナーはおそらく豆鉄砲を喰らったハトのような顔をしていた事だろう。」

「何せ俺たちの任務は防空設備の無力化だけなのに、」

「マリーと天使隊が航空機まで徹底的に破壊してしまったからだ。」

「ワレラ基地の上空を旋回しながら各自に機体をチェックさせ、」

「残りのミサイルを数えさせる。」

「3人とも総量の4割以上を使い切っており、」

「俺の方も130発近く持って来ていた通常ミサイルが」

「残り70発ほどになり、12回使用できるECMに至っては」

「あと3回で使い切ってしまう。」

「基地はもう無力化した。」

管制塔と格納庫も吹っ飛ばしたからあとは
物資の貯蔵庫とかぐらいしか無いけど。」

『…わかった。予想以上の戦果ね。』

報酬も期待して良いわよ。』

#17 Raven I

ワレラ基地を制圧し、一足先に着陸していた俺たち4人は、敵が1人もいない戦闘空域を悠々と編隊飛行してくる

攻撃部隊を滑走路から手を振って迎える。

着陸してくる誰もが歓声を上げながら着陸するが、

それを向けられるのはあの双子だ。当然といえば当然だろう。

あれだけの實力を持つ正規メンバーと新参者の傭兵2人。

大戦果を挙げたと聞けば俺だって視線を向けるのは前者だ。

「…シヨウの手柄。」

マリーも不満げに唇を尖らせている。

「気にすんな。その分、金はたんまり頂く。」

傭兵としてせめてもの強がりだったが、

俺も本音を言えば嫉妬している。

人間誰だって自分の仕事が正当に評価されないのは

あまり良い気のしないものだろう。結果が良くも悪くも。

双子はさつきからチラチラと申し訳なさそうに俺の方を見ている。
俺は「気にするな」と手を振る。

「おふたりっ！」

上空からの呼び声に見上げると、

F-35Bを使うカトラスが垂直離着陸機能を使つて俺たちのところへ舞い降りて来ているところだった。

「どうしてオレに獲物を残してくれなかつたんだよ！」

その表情は嬉しさ半分、悔しさ半分といった感じだ。

というか、カトラスは知っているらしい。

「すまんすまん、お前らが来るには

騒がしすぎると思つてな。」

「むううう……このっ、このっ！」

悔しそうに頬を膨らませて小突いてくるカトラスを

いなしている、通信が入った。

『貴様……！』

テルキスだ。復活したらしい。

『命令違反だぞ！わかってるのか!?』

どうやら自分の作戦通りに俺が動かなかった事が気に入らないらしい。しかしこういう場合は責任転嫁という方法がある。

「いいや、違うね。俺たちはカールターナーの指示通りに

敵の迎撃能力を有するターゲットのみを破壊しただけだ。」

俺は遠慮なくカールターナーに責任を押し付けると、

俺とマリーのスコアデータを送りつける。

『…なんだこれは?』

「請求書だ。なんならメロンも付けてやるよ。」

そう言っただけで俺は、

無傷のままにしておいた物資の貯蔵庫でも物色しようと踵を返した。

貯蔵庫には毎日消耗する弾薬や、イベント参加に必須の出撃燃料、

機体の改造に使う改造パーツが山のように貯蔵してあった。

制圧した基地は制圧したクランのものとなるため、

俺とマリーが手に入れるのはこの中のほんの一握りだ。

しかし、ケモノフスタン共和国といえ

ば、つい数ヶ月前にできた新興クランで、砂漠エリアを中心に活動していた。

そんなひよっこがどうしてこんなにも大量の物資を蓄え、

これだけの基地を建設できたのだろう？

確かに、クランメンバー全員を資材集め系のミッションに

集中投入していく方法は昔からあるが、どうにも腑に落ちない。

誰かが裏で操っているとしか…

『……る？ねえ、聞いているの？』

「あ、はい!？」

どうやらカールターナーが無線で話していたらしく、

俺は慌てて返事をする。

『だから、明日の午前に私のところに来て欲しいって話。』

「大丈夫です。ところで、何の用件ですか？」

『契約内容の見直し。彼女さんも連れて来て。』

#18 Raven II

翌朝。

やらかした件について身に覚えのない俺は

支持された通りにニヨツテ基地の司令室へ向かった。

後ろを付いてくるマリィは次に雇ってもらうクランの候補をリストアップしている。

司令室の前に辿り着いた俺は入室する前に深呼吸する。

「入試の時みたい。」

俺の高校入試を知っているかのように茶化すマリィだったが、マリィ自身も少し緊張している様子だった。

「失礼します。」

プシュツという未来的な音とともにドアがスライドし、

司令室の中が見える。室内にはカールターナーだけだ。

「どうぞ入って。」

促されるまま入室した俺たちは並べられたイスに腰を下ろす。

「今回集まってもらったのは、事前に伝えた通り契約内容の見直しについて。

あ、クビとかじゃなくて。」

ふうつと安堵のため息。

マリーに「ほれみろ」とアイコンタクトするが、向こうは「あっそう」と冷たい。

「昨日の奇襲作戦の戦果もそうだけど、それ以前のことも含めて再検討した結果、

…君らを特殊戦術飛行隊として再編成して

ケモノフスタンとの戦闘に備えるっていう方針が上で決まったの。」

特殊戦術飛行隊…聞こえはいいが、要は何でも屋つてわけだ。

「知ってるとは思うが、俺たちは傭兵だ。」

正規部隊にはならない。首輪をつけたいなら金を詰め。」

「それも承知の上。もし契約しなおしてくれたら、

今後はクランへの会費は無し。格納庫ももつと広いやつを与える。

一度の出撃で無条件に10000クレジットを支払う。」

舐められないよう威勢を張ったつもりだったが、あまりの好条件に覚悟が揺らぐ。

「乗った。」

マリーの方はすでに決定したようだ。

さつきまで作っていた再就職先のリストも削除している。

「待て待て。早まるな。」

「何が不満なの？」

カールターナーは譲歩の余地はあると言つてさらに金を積もうとする。

それは一向に構わないが、そこまでされると逆に怪しい。

「なあ、カールターナー。俺はもうどうするか決めた。」

「なら聞かせて。」

「その前に腹を割つて話し合おう。」

たった2人の傭兵にどうしてそこまで大金を積む？」

カールターナーはため息を吐く。

「そつか。ちよつとあからさま過ぎたかな…。」

ようやく裏があることに気づいたマリーは

カールターナーから一步離れて警戒している。

「トードを撃墜できた数少ないプレイヤー。」

そんな箔がついたプレイヤーが傭兵で、

しかもソロだつて話。そりゃ誰でも飛びつくでしょう？

だから、他のクランに舐められないように真つ先に唾つけとこうつて魂胆よ。

あなたはシグレニ同盟をクビにされた建前だけど、

実際はシグレニ同盟の再建費用と引き換えに売られただけ。」

「やば…」

マリーも事の大きさがわかってきたようで、表情が険しい。

「あなたは今やAFOでトードの次に恐れられる存在なの。」

つまり、AFO最強クランのトードを倒した、という話だけが

一人歩きして俺の実力が過剰評価されているのだ。

爆撃機を墜とじただけなのに…。

昔のエースコンバットで言えばチュートリアルと難易度は変わらないのに。

とんだ厄介ごとにも首を突っ込んでしまった。

できることならあの日あの時の自分の頭からアミスフィアを引っこ抜いてやりた
い。

「でもあれはトードが爆撃機だっただけで…!」

「私もそう思ってた。だからわざと前線に投入して試した。」

テルキスにめちやくちや反対されたけどね。」

だからあんなにあたりが厳しかったのか…。

「でもそれでハッキリした。あなたは強い。いや…、強くなる。」

司令室を沈黙が包み込む。穴があれば逃げ込みたい。

そんな気分だったが、俺のメニュー画面に

契約承諾画面が表示され、カールターナーは一步近寄る。

「さあ、返事を聞かせて。」

契約内容を承諾しますか？

YES・NO

#19 Raven III

「なんでこうなるかなあー…。」

ため息とともに地平線の彼方まで続く熱帯雨林を

眺める俺は、格納庫の屋根で寝そべってつい数時間前のことを思い返す。

「さあ、返事を聞かせて。」

脳内でカールターナーの声が何度もリピートで再生される。

それも俺がYESのボタンをタップする主観視点の映像付きで。

NOと言える大人になりたいものだ。

「やっぱり疫病神。」

そう言ったのは隣で無防備に寝そべるマリーだ。

女じゃなければ屋根から蹴落としていた。

「そりゃ俺のセリフだ。」

「自業自得疫病神。」

「誰が好き好んで自分に災をふっかけるかつーの。」

ここまで来るとそろそろ『疫病神』の二つ名が付きそうだ。

しかし、縁起が悪いというのはどうかしたい。
下手すると「シヨウと飛ぶと死ぬ」みたいな噂が流れかねない。

「そういえば…、部隊名は？」

言われてみれば確かに。

俺とマリイの再契約はしたが、部隊を編成したところで部隊名が無い。

「どうせなら『疫病神』で。」

「やめろ。本当に縁起が悪いから。」

味方に嫌われるのは考えものだが、敵に恐れられるならそれは嬉しい。

そう考えれば『疫病神』だって候補に入るが、リズムが悪い。

何か良い名前は無いかと考えること数分。

「レイヴン…なんてどうだ？」

「…れいぐん？」

「ワタリガラスのことだ。日本にも飛んでくるぞ。」

あと、道具を使うらしい。」

「ふーん…、いいと思う。」

「よし、決まりだ。」

俺は早速メニュー画面から部隊編成画面へ行き、

部隊名の欄に表記された名前を読む。

「混成特殊戦術飛行隊……。カールターナーが言ってたやつか。」

俺は部隊名をタップしてその後ろに

“レイヴン”と付け加えた。

「機体カラー変えてくる。」

マリーはそう言いながらメニュー画面を操作して

機体カラーを選ぶ。

「オツケー」

メニュー画面を操作して機体セットを装備したマリーの姿は

全身が真っ黒だった。

「黒いな……」

「カラスだし。」

「いや、そうだけど。」

「ほら、そつちも。」

マリーに言われるがまま、F/A-18FとE/A-18Gのカラーを

真っ黒にした俺は、F/A-18Fの機体セットを装備する。

「おぉー……！」

珍しくマリーが歓声を上げた。

「悪者感すごい。」

「悪者って…。それを言うならお前こそ。」

マリーは自分の背中に生えるM I Gの翼を見ながら

嬉しそうに一周回ってみせる。

「どう…？似合う？」

「ああ。悪者っぽい。」

「なんなら覆面着ける？」

「仮装。パーティーじゃあるまいし…。」

普段は服装などにこだわりのないマリーも、

ちよつとしたファッションショーのような感じで

盛り上がってきた。ファッションセンスについては皆無だが、

楽しそうに背中の翼を揺らしているマリーを観ている俺は、

誰かからメッセージが届いたことに気づいた。

どうやら仕事ようだ。

マリーにも同じものが届いたらしく、

俺と同じようにメニュー画面を操作している。

メッセージを開くとそれはブリーフィングビデオだった。
『作戦内容を伝える。』

テルキスだ。不愉快そうな顔からしてきつと楽な仕事だろう。
アイツが笑ってればその仕事からは逃げるべきだ。

#20 盲目の親鳥 I

『作戦内容を伝える。』

今回の任務はニヨツテ基地からそちらのワレラ基地を経由してユエニ基地へ向かう友軍機の護衛。

暇を持て余したりア充どもにはうってつけの任務だ。』

ホログラフィックマップに表示される友軍機には

「E-767」の文字が映し出されている。

『護衛対象はE-767早期警戒管制機。』

先日喰らった墜落ペナルティから完全に修理が終わっていない

不完全な状態での飛行だが、

ユエニ基地に向かえば補修用のパーツと交換して

即戦線復帰が可能になり、早ければ今夜の作戦に間に合う。

それと…、他の護衛機だが、

正規メンバーは今夜の作戦に向けて準備中のため、そこから集めた寄せ集めだ。

統率のかけらもないが指揮は貴様に任せる。

もし失敗した場合、その時は貴様に請求書を送らせてもらおう。
わかつたな、シヨウ。』

「疫病神。」

滑走路をタキシングする俺の背後でマリリーがボソリと漏らす。

「聞こえてるぞ。」

「聞こえるように言った。」

マリリーの沈んだ表情からして向こうにもさっきの脅し文句は送られたらしい。

ぶつぶつと文句を言われながら離陸許可を貰った俺は、後ろを無視して離陸した。

離陸して他の友軍機と合流してからもマリリーは

オーブンチャンネルで俺の悪口を言い続ける。

『不幸マグネット』

「うるさい。」

『災いスイーパー』

「黙れ。」

『災い吸着ウエットシート』

「誰がウエットだ。」

『じゃあスウエット』

「汗まみれってあのなあ…」

無線からは他の友軍機からの笑い声が聞こえる。

編隊も組めないような素人集団に笑われるのは不愉快だが、

こういう長時間飛び続ける任務では

全員が黙りこくったまま退屈な時間が過ぎることもあるので

士気向上に努めることができたと考えれば少しは

楽かもしれない。

『天災』

「それ絶対意味違うよな!？」

『こちらエッジレス。夫婦漫才はそのくらいにしてね。

ユエニ基地までのエスコート、よろしくー。』

聞こえてきたのはカールターナーの声だ。

前方を見ると、数km先から背中に巨大な翼と円盤を載つけたようなデザインの早期警戒管制機が飛んで来ている。

「…了解。全機、エッジレスを中心に編隊を組み直せ。」

『アルファ隊、了解。』

『ブラヴオー隊、援護位置に付く。』

編隊も組まないアルファ隊とブラヴオー隊は

一旦バラバラになって各々の機動で機体の向きを変えると、

カールターナーの周囲を取り囲む。

『さつてとー。』

言つとくけど私のリーダー使えないからみんな頼らないでね。』

やはり聞いていた通りカールターナーの機体は

完全な状態じゃないらしい。編隊の先頭でリーダーを見ていると、

『エッジレスさーん、この後、お茶でもどうつすか?』

早速ナンパが始まった。

これだから傭兵同士であまりつるみたくないのだ。

“傭兵”という立ち位置を無礼なことでも許されるものと勘違いしているやつばかりだ。

『俺は先頭のMIGっ子が好みだなあ…』

『ああ、良いケツしてやがるぜ。』

今度は相棒が話のネタにされている。

不快感のあまりチラリとマリーの様子を伺うと、顔色ひとつ変えていない。

マリーの感情を消せるところは見習いたいが、

こういう時くらいは何か反応して欲しい。俺はプライベート回線に切り替える。

「…レイヴン2、その…なんて言うか…。」

『気にしてない。』

俺の心配をよそに当のマリーはキツパリと言い切った。

ここまでメンタルが強いと相棒以前に男として自身をなくしてしまいうさだ。

『…いざとなったらお前がいる。』

「…ああ、任せろ。」

1時間もしないうちに予定されていた飛行経路を飛び、ユエニ基地をレーダーマップの端に捉え、向こうからも無線連絡が入った。

《こちらユエニ・タワー。接近する友軍機、所属と目的を明らかにせよ。》
レーダーに映っているマーカーの色や文字で所属まで明らかになるはずだが、マジロはよほどソロの傭兵を信用していないらしい。
いや、声色からは毛嫌いする空気さえ感じる。

「こちら混成特殊戦術飛行隊のレイヴン1だ。

エッジレスの護衛任務中だ。」

数秒の沈黙が流れる。

《確認が取れた。レイヴン隊、エッジレスの着陸を優先する。周辺を警戒せよ。》
管制塔の指示通りにエッジレスが着陸するための道を開けると、
俺は傭兵たちに散開するよう指示した。

俺もマリーと編隊を組んで基地を中心に旋回する。

『みんな、苦労様、ありがとねー。』

無事に着陸できたエッジレスの無線を聞いて俺は思わず胸を撫で下ろす。

《こちらユエニ・タワー。着陸はアルファ隊、ブラヴオー隊、レイヴン隊の順で行う。レイヴン隊は引き続き警戒を維持せよ。》

着陸を待つブラヴオー隊はまだ貰ってもない報酬の使い道で無線を盛り上げさせる。

『イヤツハアアアアア!! 楽勝だったなあ!』

『このあと飲みに行くやつ、俺の奢りな!』

俺は無線の音量を下げながら着陸の進み具合を見ようと滑走路に視線を向ける。

滑走路には着陸してハンガーに向かうはずのアルファ隊が機首を反転させてエンジンをふかしている。

《こ………エニ……ワー……ア……アた……かつ……ろを……け……》

音量を下げたばかりの無線から途切れ途切れに管制塔からの音が入る。

《アルファ隊、何のつもりだ。滑走路を空ける。》

音量を戻すと数秒としないうちに何が起きているかは理解できた。

直後、滑走路から4機のF/A-18Fがアフターバーナーで飛び立ち、俺の目の前を横切った。

「クソツタレ……!!」

「なに……!?!」

あまりの勢いに俺とマリーは機体が揺られる。

《アルファ隊、いったい何のマネだ。指示に従え。命令違反に払うクレジットは……ん……?》

アルファ隊の危険行為に管制塔は無線の声色に怒りを含むが

何かに気づいたのか、管制塔からの警告が止まった。

《ボギーが急速接近! 方位0—9—6だ。全機、警戒。場合によっては撃墜も許可する。》

『こちらブラヴオー、了解した。追加料金は頂くぜ。』

管制塔の指示でブラヴオー隊が機首の向きを変えると、

『なあ、レイヴン1? だっけか?』

今度はユエニ基地に近づいてから無言を貫き通していたアルファ隊の隊長が口を開いた。

ギヤアギヤアと馬鹿騒ぎしていた傭兵たちがシーンと静まり返る。

「何だ?」

『あんた、例の“疫病神”だろ?』

「そうだとしたら何だ、アルファ1。」

『んーやあ、ただ…、』

アルファ1は少し間を置いて口を開く。

『あんたら、今回もツキがねーみたいだ。』

「…?」

バイザー内が真つ赤に照らされ、警報音が鳴り響いた。

「クソツ！レイヴン隊、ブレイク！」

2 1 盲目の親鳥 I I

フレアを散らして急旋回すると背後でミサイルが爆発した。

『撃たれたッ！』

『主翼が……！』

ブラヴオー隊のメンバーが次々と撃ち落とされる。

『墜ちる……！墜ちるッ……！』

「誰だ！味方だぞ！ブルーオンブルー！ブルーオンブルー！」

マジ丑にも伝わるようにオーブンチャンネルで叫びながら

後ろを見ると、さっきまで友軍を示す青色で表示されていた

アルファ隊のマーカーコンテナは敵を示す緑色に変わり、

青色で表示されるブラヴオー隊機に喰らいついている。

「アルファ隊、貴隊は友軍機を攻撃している！いったいどういふつもりだ！」

アルファ隊に向けた無線に答えるものは無く、ただブラヴオー隊の悲鳴と断末魔だけ

が聞こえてくる。

「答えろよアルファ……、答える義務があるぜ……!!」

『レイヴン1、どうする?』

マーカーが敵を示しているとは言え、さっきまで味方だったアルファ隊にうまく応戦できていないマリィが俺に指示を仰ぐ。

混乱する無線で管制塔からの指示も通らない。

マリィにアルファ隊撃墜の免罪符を与えられるのは俺だけだった。

「もういい、アルファは敵だ。…全部落とせ。」

裏切りという初めての経験にあまり声を張れない指示だったが、

スイッチの入ったマリィは水を得た魚そのものだった。

俺もブラヴオー隊機を撃墜して油断したアルファ隊機の背後を取るが、

『そうはいくかよ。』

今度はアルファの声とともにミサイルの警報が鳴る。

俺はすかさずECMを起動し、飛び交う敵のミサイルを全て無力化した。

『はっはあッ!!やるじゃねーか!』

「チツ…何のつもりだ!契約違反だぞ!」

ようやく口を開いたアルファは俺の背後で品の無い笑い声をあげる。

『そうか?だが向こうの方が払いが良いもんでなあッ!』

レーダーを見るとアルファのコールサインを使う傭兵たちは

俺とマリーを狙ってばかりでユエニ基地には見向きもしていない。

『ヒヤッハッハアッ!』

背後に付かれた。アルファアのF/A-18Fだ。

ロックオンアラートが鳴り、砲弾が横を掠める。

『おらどうしたあ!俺をもつと楽しませろッ!!』

ミサイルが来る。

即座にフレアを撒いた俺はそのまま急減速とバレルロールで

背後のアルファアを追い越させた。

『何ッ!?!』

機銃を向けた俺はそのまま引き金を引く。

右腕のバルカン砲が6本の銃身を回転させながら大量の砲弾を放つ。

しかしアルファアも体を左右に揺らしたり、

フェイントをかけたたりしてそのほとんどを躲した。

『当たるかよ!』

ならばとミサイルでロックオンするが、

今度はフレアと急減速で機首を直立させるコブラ。

あつという間に俺の背後に回り込み、攻守が元に戻った。

俺と同じ機体のはずなのに、プレイヤーが変わるだけで想像もつかない動きをする。

またロックオンされた。

相手は俺よりも上手くF/A-18Fを使いこなす。

背後を取ろうとしてもさつきと同じ手は通用しないだろう。

サポート特化のE/A-18Gを使う俺が打てる手は必然と限られてくるし、今の俺の技量ではコイツに勝つことはできない。

だが…、ここでドッグファイトに乗ってやる義理はない。

俺は無線をマリーとのプライベート回線に切り替えた。

「レイヴン2、合流しよう。」

『わかった。』

卑怯者と言われようと知った事じゃない。

名誉やプライドは傭兵に必要なない。

俺は低空を逃げるマリーを見つけると、その進行方向に向かって加速した。

2人の距離はどんどん縮まり、衝突する間際で

俺は右から左に進むマリーに背を向けるように機体を

左へ傾け、敵機とマリーの間に入って右腕の機銃を構える。

「ーッ!?」

マリーを追っていた敵からしてみれば目の前に

突然俺が現れて機銃を向けているのだ。驚くのも無理はない。

ブヴヴヴヴヴヴヴ

機銃の砲弾を全身に浴びた敵機はそのままヨロヨロと高度を落としていく。

『くそつ、ドジった!!』

『氣い抜くからだマヌケ！俺が墜とす！』

交差した俺たちを追う4機のうち、1機を墜とした。

残り3機は衝突しないようお互いの距離をとる。

『シヨウ！』

一氣に加速して俺と距離をとったマリーがハイGターンで反転し、左腕を伸ばす。

何をするかはすぐにわかった。

同じように伸ばした俺の左腕をマリーが掴み、

旋回性能の劣る俺は振り子の要領で一瞬のうちに180度旋回した。

見えるのは俺たちに背を向ける3機のF/A-18Fだ。

『なんて機動だ!!』

超高速空対空ミサイル

すかさずマリーがHVAを2機に撃ち込む。

特殊兵装の中でも特に弾速の速いHVVAに背後から狙われた2機は

回避機動を取る間も無く撃ち落とされた。

『ぐあああッ!』

『マーティン、先に逝くぜ…。』

『おう、待つてろ。すぐにコイツらも送つてやる。』

これですよやく3機だ。

最後に残っていたアルファ1は戦闘開始前に管制塔が接近を知らせたボギーと合流して数を

元に戻している。

「チツ、キリが無え…!」

『まだまだ終わらねーぜ!第2ラウンドだ、ヒヤッハッハッハッ!!』

機種は変わらず全員がF/A-18Fだが、今度は茶色を基調とした迷彩が施されている。

どこか猛獣のような雰囲気漂わせる彼らは俺とマリーの攻撃を躰しつつ、俺たち2人を包囲した。

『カラスにちょうどいい鳥かごの完成だ!』

マリーは包囲に気づいて突破を試みたが、

機銃やミサイルを回避しているうちにアルファ隊は包囲網を再形成してくる。

『…っ、逃げられない…!』

ECMは残り2回。マリーの方も特殊兵装は残弾が少ないはず。

「レイヴン2、俺のECMを合図に突破してやつらの陣形を崩してくれ。」

『それだとレイヴン1が…!』

『俺の仲間を全員墜とすたあな…:カラスのくせしてやるじゃねーか!』

ハイGターンで向きを変えて向かってくるアルファ1と俺は

ヘッドオンした状態で加速する。

『来いッ!疫病神イッ!!』

俺とアルファ1の距離はあっという間に近づく。

お互いのミサイルがロックオンできる距離に入るコンマ数秒前。

俺はECMを再び起動して通常ミサイルに切り替える。

ECMのせいで向こうはロックオンできないが、俺は何の問題も無い。

『何イっ!?!』

俺は構わず撃った。

ミサイルが2発とも命中し、ズタズタになったアルファ1と

すれ違う時には機銃で撃ちまくった。

『この…卑怯者めえ…!!』

全身に被弾エフェクトを煌めかせながらアルファ1は俺を罵るが、味方の背中を撃ったヤツらにだけは言われたく無い。

ミサイルと機銃で普通なら撃墜されてもおおかしくないダメージを受けたにも関わらず、

傷だらけになってなお飛び続けるアルファ1の背後に回り込んだ俺は、

もう一度アルファ1をロックオンする。

「嘘つきは墜ちろ。」

『もう一度だ！もう一度俺と戦わせろおッ!!』

迫り来るミサイルを前にアルファ1はそう叫びながら爆散した。

2 2 盲目の親鳥 I I I

『こちらエッジレス、聞こえる?』

裏切ったアルファ隊の最後の1機を墜とした俺は、アドレナリンが引いて体にもっていた熱が冷めるのを感じながらエッジレスの無線に答える。

「こちらレイヴン1、聞こえます。」

そっちは無事ですか?」

『お陰様だね。それと、テルキスから連絡。』

進行ルートに正規メンバーを送って護衛するらしいわよ。』

「…俺たちは?」

『今日のところはお役御免つてところかしら。』

でも、正規メンバーと合流するまではよろしく。』

マジ卍の護衛機と合流した俺たちは

ニヨツテ基地へ針路をとった。

任務を外され、やるせない気持ちでいっばいの俺に

無線連絡が入る。

『状況を説明する。』

テルキスだ。

『今回の護衛任務中のアルファ隊の裏切りに対し、

上層部は現在雇用している傭兵全員の解雇、もしくは

飛行停止命令を決定した。貴様らも例外では無い。』

コイツの顔を見ずに済むようになるのは一向に構わないが、

謂れない罪で処罰されるのはまっぴらごめんだ。

「ふざけんな！その裏切り者を墜としたのは俺たちだ！」

『レイヴン1、落ち着いて。』

「……。」

マリーも不服そうな目をしているが、
表情自体は崩さない。

『その上、貴様らは今回裏切ったアルファ隊と
行動を共にしていた。』

ヤツらとの背後関係も含めて調査が終わるまで
貴様らは飛行停止処分とする。

不満があるなら契約解除だ。以上。』

俺たちの反応を聞く間も置かずに無線は切られ、

密林エリア特有の蒸し暑さが俺を嘲笑うかのように
体を包み込む。

『レイヴン1、休暇と思えば良い。』

「…そうだな。」

ニヨツテ基地に着陸し、格納庫で機体セットを解除すると、メニュー画面の機体セットの欄には「アクセス拒否」の文字が表示され、何度タップしても動かない。

解除する方法は契約を解除するくらいしか無いらしいが、裏切り者とは何の関係もない以上は

下手に動くこと関与を認めたと捉えられかねない。

完全にすることが無くなった俺とマリィは基地の娯楽室を覗く。

今夜の作戦の準備のためか、マジ卍の正規メンバーは

1人も見当たらず、いつも馬鹿騒ぎをしている傭兵たちも居ない。

「…無人。」

「…だな。」

ポツリと呟いたマリィに俺も答える。

さほど天井が高いわけでもないにも関わらずその声が響いた。

「ふん…♪」

飛行停止処分を喰らって数分の割にマリィは

嬉しそうに鼻息を鳴らしてドリリンクバーへ駆け寄る。

置いてかれた俺はジョッキに得体の知れない液体を

並々と注ぐマリーをただボケーっと思つめる。

続いてドリンクバーに併設されたバイキングに移動してチーズバーガーにフライドチキン、フライドポテトにホットドッグ…と手当たり次第にジャンクフードを掻つ攫い、トレイいっぱいに積み上げたジャンクフードとジョッキを

抱えたマリーはその足でシアタールームに入つて行く。とりあえず普通サイズのコップにジンジャーエールを注いだ俺はポテトチップスだけ取つて後を追う。

マリーのセレクトで上映され始めたのは恋愛モノのアニメ映画だ。

しかし当のマリーは映画そっちのけで

チーズバーガーに齧り付く。

「お前…、よくそんなに食えるな…」

「…おいひい」

「ああ、そう……」

飛行停止処分のせいでかなり凹んでいる俺とは対照的だ。

俺の場合は怒りやらショックやらで

ジンジャーエールすら口に含む気になれない。

「ん……んく……、ふはあっ……」

幸せそうにチーズバーガーたいらげたマリーは

ホットドッグに手を伸ばしかけてそれを止める。

「……何?」

どうやら俺に見られているのが気になるらしい。

「いや、幸せそうに食うなあ……って。」

「このメニューをコンプするのが目標。」

それだけ言うと、マリーはホットドッグに齧り付き、

ジョッキに注がれた液体で流し込む。

「んく……んく……んく……ふはああっ!!」

大人顔負けの飲みっぷりだ。

もしかするとビール会社からCMのオファーが来るかもしれない。

フードファイターの如き勢いでジャンクフードを

かき込むマリーを尻目に俺はいつものまにか飲み干していた。ジンジャーエールのおかわりを取りにシアタールームを出た。

ドリンクバーでジンジャーエールを注いでいると、娯楽室に入ってくる1人の女性プレイヤーが目に入った。

茶髪で背は低く、ボインボイン。

「何だ。」

そして性格はキツイ。

「……。」

俺は無言でコップに視線を戻した。

「おい、お前。」

声をかけているのは俺に対してだろう。

そうであって欲しくないが、俺以外に人は居ない。

「…なんか用か。」

目を合わせると殺されそうなので俺はコップだけに

視線を集中する。

「レイヴン隊を探している。知らないか？」

俺たちのことだ。

俺は思わず隣のロリ巨乳を見る。デカイ。違うそうじゃない。

「ああ、知ってる。来いよ。」

素っ気なく返した俺は足早にシアタールームへ向かった。振り切れるはずもないが振り切れた事を願って。

俺はシアタールームに入るや否や

「マリー、問題発生だ。」

「……ん?」

マリーに非常事態の発生を告げるが、

「なんだ。ここか?」

「ぶふうううつ!?!」

現れたロリ巨乳を前にマリーはジュースを吹き出した。

2 3 その女、危険につき I

マリーは現れた女を見るなり即座にソファア―に身を隠す。

「誰…!?!」

「それは確かに。俺もまだ聞いてない。」

俺とマリーの視線が集まる。胸に。

彼女も俺たちの視線に気付いたようで、

ゴミを見るかのような冷やややかな視線を向けてくる。

「死にたいのか、お前たち。」

射抜くような視線に俺たち2人は同時にスツと目をそらす。

「それよりレイヴン隊のところへ案内しろ。」

「え…?」

マリーは思わずマヌケな声を漏らす。

それはこんな怖いオネーサンが自分たちに

用があると言ってくる場合の正しい反応だ。

だが、向こうはまだ俺たちが

レイヴン隊と気づいていないらしい。

どうせテルキスが寄越した監視役だろう。

ここはひとつ、からかうのも手かもしれない。

「どうやらまだ居ないみたいだ。そんなに急用なのか？」

「無論だ。」

「そうか。ならコレを。」

俺はマリーのフライドポテトを取り上げて彼女に手渡した。

彼女は眉間に皺を寄せる。

「なんの真似だ。ふざけているのか？」

「大真面目さ。コレをハンガーの入り口に置いて

どっかに隠れて待ってろよ。

見つけ次第すぐに飛んでくるぜ。」

「……わかった。やってみよう。」

怪訝そうな目で俺を見ながらフライドポテトを受け取った彼女は

ポップコーン用のバケツを取るとフライドポテトを

大量に詰め込んで小脇に抱えて出て行った。

なかなか滑稽な絵面ではある。

「どうすんの。」

「退屈しのぎだ。来るか？」

「行く。」

娯楽室から出て行った彼女の後を追い掛けると、

彼女は俺の指示通りハンガ―の入り口に

フライドポテトのバケツを置くと、

ハンガ―の外壁の影に身を潜めた。

その姿を俺たちはハンガ―の屋根から見下ろしている。

まさかこんなにもアツサリ引っかかるとは思わず、

この後どうするか思いつかない俺は

取り敢えず律儀にフライドポテトを見張り続ける彼女の姿を

スクリーンショットに収める。

ついでにメッセ―ジに添付して

トードとテルキスに送りつけておいた。

「…飽きた。」

一方のマリーは変化が無さすぎてさつきから欠伸をしている。

確かに、彼女はさつきから彫刻のようにピクリとも動かず

ハンガーの方を睨み続けている。

「そうだな。帰るか。」

「ん。」

再びシアタールームに戻った俺たちが映画の続きを観ていると、ガンツという衝撃とともに俺は椅子から転がり落ちた。

「痛つてえ…」

振り返ると椅子がポリゴンのカケラとなつて碎け散つた。

マリーは隣の椅子に座つたまま口をぽかーんと開けている。

「説明してもらおうか、レイヴン。」

「あー……えつと……」

青筋を浮かべて俺を見下ろすさっきの彼女は

かなりお怒りの様子だ。

一步、また一步と俺に歩み寄ってくる彼女は誰を

痛ぶるつもりなのか、指をバキバキ鳴らしている。

ーードンっ

彼女の足が俺の股の間に突き立てられる。

危うくムスコが1人死ぬ所だった。

「わ……ちよっ……、待て……話せば分かる！」

ようやく彼女の意図を理解できた俺はしどろもどろに

弁明しようとするが、彼女はそれすらする機会を与えずに

「問答無用。」

ーーポフッ

俺の腹に蹴りをかます。

「ぐげっ……！」

ペインアブソーバーで軽減されているとはいえ、あまりの痛みに悶えながら逃げ場を求めて

立ち上がるうとする俺に

ーバキッ

今度は打撃を喰らわせる。

「ぐはっ…」

壁に叩きつけられた俺が次の瞬間目にしたのは

俺の頭部に飛びかかる彼女の姿だった。

彼女の全体重と遠心力で振り回された俺は最終的に

シアタールームの床に叩きつけられ、

柔道の十時固めを決められた。

ービキビキ…

「あーっ！タンマタンマー！やめ…」

少しずつ力が加えられていくのがわかった俺は

参った参ったと床をバンバン叩くが、

ーカキョッ

彼女はやめるどころか一気に力を加えた。

#24 その女、危険につき I I

「そこまでだ、セーナ。」

肩の激痛で幻聴が聞こえたのかと思ったが、

肩に加えられる力が弱まっていることからして現実のようだ。

あの声はテルキスだが、今はこの女を止められるなら誰でも良い。

やつのことで解放された俺は肩が外れた左腕を

だらんとぶら下げながら立ち上がると、

文字通り頭を抱えたテルキスがため息をつく。

「セーナ、お前の任務は？」

「レイヴン隊に合流することだ。」

「じゃあ何でレイヴン隊の隊長の肩が外れてるんだ。」

「それは……」

セーナと呼ばれた少女は不服そうに俯く。

一方、俺がいろんな意味で締められる様子を

まざまざと見せつけられたマリーは

セーナに完全にビビっている。

ペインアブソーバーで大幅に軽減されているとはいえ

ジーンとした痛みが残っている俺は

どうにかならないかと無事な右腕で色々動かしてみるのが、痺れが酷くなるだけでどうしようもない。

もう一度ため息をついたテルキスがメニュー画面を操作してこの場の3人にメツセージを送る。

「出撃だ。準備しろ。お前はまず肩の治療だ。」

仮想世界の怪我は数分で治るため特に治療する必要はないが、

その数分も待てない任務らしい。

「飛行禁止処分。」

マリーの呟きにテルキスは3度目のため息をつく。

「頭数が足りない。今回は特例だ。」

俺の左腕を持ちながら答えたテルキスは

「それじゃあ3で行くぞ。」

と言うと腕の力を抜く。俺も肩の力を抜いて目を瞑る。

「いち、にい、さん…」

反射的にビクツと力を込めた俺は、

何も感じなかったため戸惑いを隠せずにテルキスを見るが、

「カキヨツ

「うっ…いつてえ…、バカ野郎…!」

まさかのタイミングで全身を走った感覚にポロつと暴言が溢れる。

「これに懲りたらセーナを怒らせないことだ。」

言われなくても体で理解したが、

レイヴン隊と合流するということはセーナと

一緒に飛ぶと言うことだろうか？真つ平御免なのだが…。

数十秒後、

痺れが残る左肩をさすりながら格納庫で機体セットを

身につける俺は、ブリーフィングビデオを再生した。

『数時間前の傭兵部隊の裏切りで、

ほとんどの傭兵部隊を解雇した我々は現在、

補助戦力が不足している状況だ。

早期警戒管制機の修復は完了したが、

護衛戦力に正規メンバーを付けると遊撃戦力が不足する。

そこで、暫定的に：仕方なく貴様らを起用することとなった。

だが、俺やトードはそう簡単に

貴様らを信用するほどバカじゃない。

本隊の戦力から貴様らのために強力な監視役をつけた。

実力は：言うまでも無いな。』

相変わらずの口調にイラ立ちを隠せない俺は

舌打ちをする。

『前置きはさておき、作戦内容を説明する。

前述の通り、貴様らの今回の任務は遊撃だ。

意味はわかるな？本隊がソレガ基地を奇襲する間、

敵の増援部隊を徹底的に潰せ。

本隊から貴重な戦力を抜いた分それ相応の働きをしろ。

それと、マジ卍は砂漠エリアにカラ基地を持つが、

本作戦では本隊の補給基地となるため

貴様らのための滑走路は無い。間違っても近づくな。』

滑走路に出ると、マリーの奥から

滑走路に出てくるセーナが目に入った。

背中の翼は可変翼で、ウエポンベイには通常ミサイルの他に

誘導貫通爆弾
GPBが吊るされている。

機体はおそらくTornadoだが、

あの機体はAFOでは攻撃機扱いだったはず。

現にセーナの特殊兵装は対地攻撃にしか使えない。

「セーナ、対地兵装は必要無いぞ。」

『余計なお世話だ。』

「…そうか。」

俺はそれ以上なにも言い返せず、離陸した。

密林エリアを東に飛び続けると青がかった障壁が行く手を遮る。

密林エリアはここまでという目印であると同時に

この先は砂漠エリアに転送される境界線でもある。

そしてこの先の砂漠エリアはケモノフスタン共和国の勢力下だ。

マジロも砂漠エリアにはカラ基地を持っているが、

だからといって油断して良い理由にはならない。

飛び込むと同時に狙い撃ちにされる可能性だつてある。

「レイヴン隊各機、システムチェック。」

『レイヴン2、了解。』

『セーナ、了解。』

プレイヤーネームで無線に応答したセーナを

注意するべきか俺は一瞬悩んだが、

AFOではたまに面倒な輩が現れる。

覚悟を決めるのに少し間を置いて俺は無線を繋いだ。

「セーナ、無線でプレイヤーネームを使うのはまずい。」

「コールサインはレイヴン3で良いか？」

『コールサインならある。』

「そうか。じゃあそつちを使ってくれ。」

『こちらレイヴンマスター、了解。』

セーナのコールサインを聞いて基地での会話が頭をよぎった。

“監視役”テルキスはそう言っていた。だが本当にそうだろうか？

裏切りを警戒するくらいなら俺とマリーを

別々に組ませておいたほうがいい。

なんなら他の傭兵と同じように解雇してしまえば楽だ。

「もつと別の理由……」

『レイヴン1、何か？』

「いや、何でもない。」

#25 True reverse I

密林エリアの境界線を過ぎると一瞬の光ののちに砂漠エリアの最西端に転送された。

視界には地平線の彼方まで続く砂、砂、砂。

360度どの方向を見ても見渡す限りの砂漠だ。

『こちらAWACSオーデイン。』

これより作戦指示を行う。』

AWACSの名前がいつもと違うが、きつとトードの仕業だろう。

『レイヴン隊は方位0—9—0に進路を取り、』

公式ベースから接近する敵航空部隊を迎撃せよ。』

方位0—9—0ということは、北を0度と見た時の90度。

つまり真東だ。進路に変更はない。

「レイヴン隊各機、高度1万mまで上昇。

太陽を背に敵機を上から叩く。」

『レイヴン2、了解。』

『レイヴンマスター、了解。』

太陽を背に戦うのは一歩間違えば自分のシルエットが丸見えになる諸刃の剣的な戦術だが、

AFOのプレイヤーが頼りにするのはHead up display

HM D 上の味方や敵に表示される

マークをロックオンした時の表示だ。

そしてそれは赤色で表示されるため、

夕日を背にした相手はロックオンできているのか

分かりづらいのだ。

相手が腕の立つプレイヤーなら話は別だが、

できる小細工は全てやっておきたい。

HMDに表示される高度が1万mを越えると、

いくら機体セットに身を包まれていようとも少し寒い。

その上、この高度では少しでも荒い機動を取ると

すぐにエンジンが失速ストールを起こす。

この高度でのドッグファイトはケモノフスタン側の

カナード翼機に部があるため、避けたい。

『こちらレイヴンマスター。レイヴン1、いいか?』

戦略を練っている俺の耳にセーナの声が届いた。

よく聞けばなかなかの美声である。

「どうした、レイヴンマスター。」

『戦闘が始まったら私を前衛へ。』

だが、その美声のあまり、俺は一瞬耳を疑った。

攻撃機が前衛…?!

何をバカな事を言い出すのか。

「許可ネガティブできない。前衛はレイヴン2だ。」

『了解、では私は何を。』

そう言われると確かに痛い。

対地攻撃機なんて使ったことのないおれは

その性能を理解できていない。

頭の中にあるのは「基地攻撃以外に活躍できない」という

攻略サイトの情報のみだ。

しかし、なぜ上は攻撃機のプレイヤーをよこしたのか。

こうなることは目に見えていただろうに。

今回F/A-18Fで出撃した俺はECMで援護することもできない。はつきり言ってお荷物だ。

使い所に困るからそばに置かれる。

監視役としては絶好のポジションなのだろうか。

『レイヴン1、指示をください。』

どうしようもない。気に食わなくても俺の部下だ。

捨て駒のように使うわけにもいかない。

「…レイヴンマスターは俺の直掩に付け。」

『…!?!』

マリーは驚愕の表情を浮かべるが、俺と目が合うと

すぐに逸らして普段通りの様子を取り繕う。

あとでしっかり弁解しないといけないだろう…。

『こちらAWACSオーディン。機影を捕捉した。』

方位0-5-7、高度100mを高速でソレガ基地に飛行中。

数は5。敵味方識別装置IFFに応答無し。』

「レイヴン1、了解。」

敵機と判明次第、ただちに迎撃する。」

A W A C Sとのデータリンクで表示された敵機の方へ、
アフターバーナーで加速して向かう。

射程が長く、4つの敵航空機を同時に狙える4 A A Mを選択した。

マリーも高速高威力のH V A Aに切り替えたようだ。

セーナは俺の背後を黙ってついてきている。

敵の無線が混じってくる。

『敵機だよ！』

『太陽で見えない！』

狙い通りだ。

5つの敵マーカのうち4つにロックオンした俺は

間を空けずに発射した。

「良いぞ、レイヴン2。」

『……』

さっきのことで不貞腐れているのか、

無言で急降下して行くマリーは俺が発射したミサイルを

躲そうと編隊を崩したケモノフスタンの

プレイヤーの1人に食らいつく。

『後ろに…!?!』

あつという間に1人が火の玉に包まれて砂漠に墜ちていく。間を空けずにリロードが終了した俺は2度目の斉射。

しかし、さすがに2度も同じ手が通用する相手では無かった。

2度目の斉射を易々と躲して退けたケモノフスタン側の

プレイヤーたちは2機がマリーに。

もう2機が俺たちに狙いを定める。

セーナに逃げるよう指示をしようと口を開いた俺の隣を

セーナが通り抜けた。

「あいつ何をつ…!?!」

困惑する俺を置いて単機、敵に突っ込むセーナを見た

ケモノフスタン側のプレイヤー2人は

セーナが攻撃機だと分かった途端に速度を増す。

『飛んで火に入る夏の虫つてやつね。』

『攻撃機なんてチョロいよ!』

アフターバーナーで追いかける俺はロックオンすると同時に

4 A A Mを2発ずつ発射するが、

ヘッドオン状態の彼女らがすれ違う瞬間には間に合わない。

敵機からミサイルが放たれた。

通常ミサイルが4発。

対するセーナは更に加速する。

ミサイルとセーナが衝突する寸前。

セーナの体がローリングを始め、フレアを放出する。

四方八方に散らばったフレアを追いかけていくミサイルは

セーナには目もくれずに彼女のはるか後方で爆散し、

俺の4 A A Mもそれにつられて目標を逸れる。

動揺するケモノフスタン側のプレイヤーたちが

左右に分かれ、セーナは体を左右に一度振って上昇した。

『があああああああつ!?!』

『うつ...!?!』

セーナが無事にミサイルを躲したことで安堵していた俺は、

敵プレイヤー2人の断末魔で今度は目を疑った。

敵プレイヤー2人の背中に何かが突き刺さり、

腹から突き抜けているのだ。

ワインボトルに羽を付けたようなデザインのは、

紛れもなくG P Bだ。地中貫通爆弾

なぜ？どうして？どこから？

バグではないかと疑いたくなるような光景に

俺の理解が追いつくよりも先に爆弾は

爆発するという役目を果たして敵プレイヤーを木っ端微塵に
吹き飛ばした。

#26 True reverse II

「セ…、レイヴンマスター！何を考えてる!?!」

目を疑うような飛び方を見せつけられた俺は、

驚きや戸惑い以前に怒りに任せて怒鳴ってしまふ。

それはもうコールサインも忘れるほどに。

『お前たちの茶番に付き合う義理は無い。』

私はマジ卍の利益のために行動する。』

冷めた表情で再び編隊を組んだセーナは、

遠くで2機目の敵機を撃ち落とすマリーを

見ながらメニュー画面に何かを打ち込んでいる。

《こちらオーデイン。方位0―7―4より未確認機ホが

多数接近。レイヴン隊は敵機と確認でき次第、

直ちに迎撃せよ。》

A W A C Sからの指令を受け取った俺は

マリーの合流を待つて指定された進路に機首を向ける。

そして接敵するまでの数分で戦略を練り直す。

セーナというプレイヤーは攻撃機を極めまくった

いわゆる玄人プレイヤーだ。

俺があらゆる任務に対応できるようにマルチロール機を

選んだのとは逆に、

攻撃機で全てを熟せるようにしている。

そして彼女は俺より強い。心配するだけ無駄だ。

今の俺が制限を掛ければそれはただの足枷となりかねない。

「編成を変える。レイヴン2は俺と2エレメント機編隊を組め。

レイヴンマスターは自由に飛べ。」

『オツケー』

『了解。ありがとう。』

セーナは嫌味っぽく礼を言って翼を軽く振ると、

そのまま可変翼を閉じて急加速、上空の雲の中へ消えた。

『レイヴン1』

呼びかけてくるマリーの声は何とも言えない憤りを訴えてくる。

「さつきは悪かった。」

『…別に。好きにすれば良い。』

咄嗟に謝罪を口にした俺の選択は間違っていたようで、マリーは拗ねたような態度でソツポを向く。その姿はどこかで見覚えのある気がしたが、視界端のレーダー画面に現れた光点によってその思考は遮られた。

『機影を目視。5機編隊、Rafale MとTyphoon。』

セーナが続くように報告し、

マリーは無言で俺の背後に着いて並走する。

2人はすでに戦闘準備を整えているようだった。

俺も頭を振って思考を戦闘モードに切り替える。

ラファールの対空用の特殊兵装はリロード速度が

早いHCAA高積載空対空ミサイルだけだ。

セーナのように対地兵装を敵機にぶち当てるような

猛者じゃない限り、対空戦で注意すべきはそれだけだ。

対するタイフーンは戦闘機というだけあって

3種類の特種兵装は全て対空用。

高機動空対空ミサイル 6目標マルチロックオンミサイル
 H C A A に 6 A A M、
 超高速空対空ミサイル
 H V A A と、

どれも使い方によつてはとても厄介なミサイルだ。しかし、話によればケモノフスタンのメンバーはほぼ全員が素人。

「よし、2人とも。タイフーンを優先して狙うんだ。」

『チツ…、なぜ私が』

『…自分でやればいい。』

2人とも俺に対する当たりが厳しい。

俺も朴念仁というわけでは無いから

それなりに心当たりはあるが、今やるか…？

「ん…つと…」

とりあえず、こんな雰囲気は無理やり仕切つても

うまくいくはずがないのは火を見るよりも明らかだ。

となれば、逆のやり方を試すのも手だろう。

たとえそれで失敗してもこっちは雇われの身だ。

正規メンバー以上の働きを期待して貰つても困る。

「じゃあ、各機自由戦闘。」

ぎやあぎやあど文句を言ってくる2人を置いて
アフターバーナーを吹かす。

「久しぶりだな…。」

半ば無意識に呟いたように、

1人で戦うのは数週間、いや、数ヶ月かそれ以上ぶりだろう。

自分の能力を確かめ直す良い機会だ。

レーダーに映る敵機が44目標マルチロックオン空対空ミサイルA A Mの

射程に入った。

<相手は3機?>

<油断しちゃダメ>

<編隊飛行もできないなんてウチら以下じゃん>

敵にはバカにされているようだが、

それが命取りだ。

俺は4 A A Mを発射すると、回避のために

編隊飛行を解いた隙を狙ってTyhonの背後を取った。

敵はカナード翼機の機動性を活かして

右へ左へと回避機動を取るが、俺だつてドッグファイトを避け続けてここまで成り上がったわけじゃない。

敵の動きにピッタリ合わせてロックオンした。

Tyhoonはフレアを放出してさらに左へバンクしたかと思うとスロツトルを緩めず豪快な宙返りで俺を振り切ろうとする。

俺はF/A—18Fの中速度域での安定性を活かし、

巡航速度までスピードを落とすとハイGターンで

Tyhoonの背中を捉え、機銃を構えて引き金を絞った。

毎分6千発を超える速度で連射される機関砲弾が

Tyhoonのプレイヤーの左肩から右の脇腹を縦断し、体を真つ二つに引き裂く。

よくこれでR18指定されないなあとつくづく思うが、

余裕をかましている暇はないと言いたげに

ロックオンアラートが鳴り響いた。

続いてミサイルアラート。

宙返りの途中で失速した状態の俺は無理に回避するのを

諦めてフレアを撒き、失った速度を稼ぐために

地上めがけて急降下。

後方でフレアに釣られたミサイルが爆発し、
間髪入れずに今度は6発のミサイルの接近を

A W A C S が警告する。また T y h o o n だ。

優先目標だけに願ったり叶ったりだが、

大方、機体性能的にいちばんドッグファイトに向いてない俺を
狙つてのことだろう。

「カモられてたまるか……！」

機首を水平にしてバレルロールを始めた俺は

右腕の機関砲を後ろに向けて砲弾をばら撒く。

A F O だからこそできる芸当だが、

当たるとは滅多にない。

しかし、ミサイルが6発もまとまって飛んでくれば

その確率も上がる。

早速、先頭から2番目のミサイルが砲弾で撃ち落とされ、

3発目を誘爆させる。

4発目と5発目はシーカーがミサイルの爆炎を誤認して自爆した。

残りは1発目と6発目。

ミサイル2発なら余裕で躲せる。

大きく右に旋回してフェイントを掛けた俺は

そこから左に切り返して時計回りのバレルロールを始める。

2発は呆気なく俺を見失い、迷走し始めたが、

母機のTyhoonは健在だ。

再び背後を取られるが、流石に攻守交代すべきだろう。

減速しながら通常の機動に戻った俺は、

ロックオンアラートが鳴ると同時に

機首を大きく上げてコブラを決めた。

こうなればいくら機体性能が優れた戦闘機でも

素人のパイロットは軽いパニックを起こす。

フレアを撒き、アフターバーナーを使ってでも

敵を振り切ろうとするが、

速度が速いと旋回性能はガタ落ちする。

カナード翼戦闘機と言えど例外はない。

目の前のTyhoonパイロットもそうだ。

俺は機関砲の射程から逃げられるまで砲弾を浴びせ、動きが鈍ったところにミサイルを撃ち込んだ。

ミサイルで脚とエンジンを吹き飛ばされ、

機関砲で垂直尾翼をへし折られたTyhoonが墜ちていく。

さらなる獲物を求めて周囲をグルリと見回した俺は、

黒煙を吐きながら逃げる rafale Mを追うマリーを見つけた。

レーダーを見る限りあれが最後のようだ。

マリーが背後を取り、トドメの一撃を放とうとする。

その時、遙か後方のソレガ基地から白い光を放つ光球が

打ち上げられた。

A W A C S から状況を知らせる通信が入る。

《オーデインからレイヴン各機。

ただちに戦闘を中止せよ。》

「こちらレイヴン1、意味がわからない。説明をしてくれ。」

《ケモノフスタン側が休戦交渉を申し出て来た。

上層部が受け入れるかはともかく、エツジレスの

指示だ。戦闘を中止し、待機せよ。》

「レイヴン1了解。レイヴン2、聞こえたな？」

『レイヴン2、確認。』

マリーは不満気な表情を浮かべてロックオンを

解除したようだが、敵機の背後を離れるつもりは無いようだ。

#27 Cold war

《こちらオーデイン、情報を更新する。

上層部はケモノフスタン側と“終戦協定”を結ぶそうだ。

そのため、現時点をもって戦闘は終了。

レイヴン隊も基地へ帰投せよ。》

戦闘終了…？

俺たちが戦闘している間にソレガ基地の爆撃は

成功したようだが、ソレガ基地から遠く離れた俺の目でも、

基地の機能がまだ生きていることぐらいわかる。

表面では冷静を保っているつもりでも、

冷や汗が心の焦りを自覚させる。

「こちらレイヴン1、その命令には賛同できない。

ここで潰しておかないと敵は勢いを増す！

協定なんてのはハツタリだぞ！」

俺は相手がNPCということも忘れてオーデインに怒鳴るが、

《シヨウ、貴様いつから政治屋になった？

非正規ごときが口を挟むな。》

返事をしたのはテルキスだ。

『テルキス、シヨウの意見は正しい。』

マリーも俺に賛同してくれるが、

相手にしてもらえないとテルキスはそれを一蹴して

一方的に無線を切った。

ーダンっ

娯楽室のテーブルに拳を思いつき叩いたのは

俺ではなくマリーだった。

「納得できない……！」

いつも冷静なマリーが珍しく感情的だ。

やはり俺と同じようにあのタイミングでの

申し出に違和感を覚えていたのだろう。

何せケモノフスタンは新興クランで、

本来ならM i g 21やF-4Eのような旧型機を

少しずつ弄りながら飛ばしているレベルだ。

それがどういうわけか、

新鋭とまでは言えなくとも、初心者にしては

やけに高価で高性能な機体をメンバー全員が乗り回し、

基地まで持つているときた。

どう見ても普通じゃない。

「黙れ。」

セーナが個室の壁に背を預けながらマリーを睨む。

マリーも負けじと睨み返す。

「お前たちと素人と違って我々には

ドクトリンというものがある。」

ほう…。

たしかにそういう戦術規範があるならこの状況も

納得できる。

この協定も次のための布石というわけか。

「ならそのドクトリンとやらを俺にも聞かせてほしいな。」

俺はテーブルに脚を載せてセーナに視線を合わせる。

セーナは相変わらずキツイ目付きだが、

レイヴン隊の隊長である俺がいちいちビビつてられない。

「それは…」

セーナは口どもると視線を逸らして表情を濁らせる。

「…私も…知らない。」

ズコツという効果音とともに隣の相棒が

椅子から滑り落ちた気がするが、まあ無理もない。

セーナは羞恥心からか顔が真っ赤だ。

しかし、堅っ苦しいやつと思っていたセーナが

意外と可愛い表情をするものだ。

きつとトードの野郎のお気に入りには違いない。

「口先だけならなんとでも言える。」

椅子に復帰したマリーはため息を吐きながら

嫌味っぽく言う。

「う……うるさい！お前たちは傭兵だ！」

我々の方針に口出しするな！」

「まあまあ、落ち着けよ。悪いな、野暮なこと聞いて。」

ジョッキのジンジャエールで喉を潤した俺は、

一呼吸置いて口を開いた。

「それじゃあ、お互い立場は違えど

同じ部隊、同じ任務で同じ空を飛ぶ身だ。

今の状況を俺たちなりに整理しよう。」

2人の同意を待たずにメニュー画面を開いた俺は、

それをテーブルいっぱいに映し出せるよう拡大する。

「まず俺が疑問に思うのは、

新興クランのケモノフスタンがここまで強くなっている理由だ。」

「同じく。」

声を合わせるマリーは俺の操作を見ながら

何をするのか不思議そうに覗き込んでいる。

「えー……と……ケモノフスタン……ケモノフスタン……あった。」

映し出したのはクランのランキングだ。

無論、トップはマジ卍。ふざけた名前だ。

それはさておき、

結成から半年以下のクランをリストアップし、

その中から勢力の強い順に並べ替えると、

トップに出たのはケモノフスタンだ。

だがダントツで戦闘力が高い。2位と2倍以上の差をつけている。

「半年でこれは異常だと思っんだ。

個々のプレイヤーが強いならまあわからないでもないが、

見たところマジ卍のプレイヤーと

良い勝負に持ち込めるのは3〜4人程度だ。

となると考えられるのは…」

「裏に誰かが…」

ポツリと漏らしたのはおとがいに手を当てて

俺の話を聞いていたセーナだ。

「そう、俺もそう考えた。

だがマジ卍にこんな素人集団をぶつけたって

大したダメージは受けない。

まあ管制塔ごと吹っ飛んだ野郎もいやがったが」

その「野郎」とは無論、我らがクソ指揮官のテルキスだ。

だいたい俺はカトラスのスカウトで

カールターナーと契約したのに、

いったいどのタイミングであいつが

しやしやり出てきたのだろう？

よく考えればなんの指令も受けていないのに

いつのまにか指揮官ツラしてる。

マリーがぶふつと笑い、セーナも思わず苦笑。

「それはさておき。」

今の段階でこの状況を操っているヤツはわからないし、

誰がどこで得をしてるか考えても

これ以上は推測の域を出ないわけだ。」

「どん詰まり。」

現状を一言で言い表してくれたマリーは

ふと何か閃いた様子で自分のメニュー画面を開き、

インターネットに接続するとなにやらキーボードを叩く。

「これ。」

映し出されたのは右肩下がりの折れ線グラフだ。

「なんだこれ？」

率直な感想を発した俺の脇腹を肘でど突いたマリーは

それを壁に拡大して投影する。

「これはAFOで起きたクラン同士の戦闘の回数を

ひと月単位でグラフ化したもの。」

なるほど。

いちばん左端はリリースされた月で、

いちばん右端は今月というわけだ。

今月はまだ集計中だが、言うまでもなく最近は平和だ。

リリース直後から急激に増えていく戦闘回数は

ピーク時の数字を数ヶ月維持すると徐々に平坦になっていき、

今年は減少傾向にあるうえ、

ここ数ヶ月は片手で数えられる程だ。

「平和だな。まるで冷戦みたいだ。」

「で、何が言いたいんだよ?」

平和なのは良いことじゃないか、と俺が言いかけた時、

「戦争ゲームに平和は不要。」

マリーは冷たくドスの効いた声でキツパリと言いつつ切った。

言われてみればその通りだ。

自らの闘争本能を満たそうとログインした

戦争ゲームが毎日平和じゃ溜まったもんじゃない。

AFOを冷戦状態にしている二大巨頭といえば、

マジ卍と常勝軍だ。

とすると、常勝軍にも同じことが起きているのだろうか?

曖昧な情報の中から納得できる結論を探そうと頭を回転させるが、

そもそもまともなソースからの情報が少ない。

それはセーナも同じだったようで、

どうにも煮え切らない表情をしている。

「でもただの推測。」

しかめっ面の俺たちを見たマリーは

腕時計に目を向けながらそう言った。

釣られて俺も腕時計を見る。なるほど。

時間は夜の8時に近づいている。

「あつ、バイト……！」

聞き覚えのある、しかし明らかに口調の違う声の主を見ると、セーナが青い顔をしてログアウトボタンを探している。

やがて俺の視線に気づいたのか、

「さ、先に失礼すりゆぞー！」

ポリゴンのカケラとなって消えていく彼女は

しまったと言った表情で何か言いかけて消えた。

「囁んだ。」

「囁んだな。あれは。」

2 8 B l u r r y

積乱雲が城のようにそびえ立つどこまでも蒼い空。

先生の不在で4校時目が自習になったのをいいことに、

俺は校舎の屋上で一足先に弁当を広げていた。

南に登って真上から照り付ける太陽に手をかざしながら、

遙か上空を西へ飛ぶ飛行機雲を眺める。

航空自衛隊のF-15Jだ。

今の航空自衛隊の主力はすでにF-35シリーズだが、

1日3回以上のペースで飛来する領空侵犯機を

毎度毎度、国家機密の塊に相手させるのは

さすがにまずいのだろう。

この壱津島を通過する自衛隊の戦闘機は大方F-15だ。

昼休みの開始を告げるチャイムが鳴り、

それから数分としないうちに

屋上に通じるドアが開いて新たに人影が現れる。

目の上に手をかざして日陰を作った俺は

それが誰なのか、確認するまでもないが確認した。

「おーっす。今日は早いね。」

気だるそうに、しかし表情だけは一丁前に笑顔で

手を振る幼馴染の長瀬真莉は

軽快なステップで彼女の特等席である屋根の上に登り、

パックジュースにストローを突き刺す。

「ああ、先生が出張で自習だった。」

「ふーん…。」

ズゴゴーっとジュースを啜った長瀬は俺の真上に来ると、

イヤホンをつけてスマホの音楽を流し始めた。

「全てのものがとてもぼんやりとしている」

聞き覚えのある曲だ。

俺はこの曲を知っている…。

「そして、誰もがとても偽者じみている」

この曲は姉ちゃんが鼻歌交じりによく口ずさんでいた曲だ。

懐かしい歌詩に目を閉じる。

姉ちゃんが制服に身を包む後ろ姿が脳裏に浮かぶ。

「お前は全てを取り去れるか！」

お前は全てを取り去れるのか！

ああ、お前が俺の顔に押し付けたんだ

お前が俺に与えたこの苦しみ

お前は全てを取り去れるか！

お前は全てを取り去れるのか！

ああ、お前が俺の顔に押し付けたんだ」

曲名までは知らないが、

長瀬が熱唱するサビの部分聞いてみると

何かを心の底から訴えかけられているような気分になる。

それが何なのかまでは理解できない。

曲の終盤に差し掛かると長瀬は屋根から飛び降りて

俺の前に立つ。

「――お前は全てを奪い去った

もう一度説明しろ！もう一度説明しろ！

もう一度説明しろ！」

何もかもを無視して何かを訴えかけるように最後のフレーズを歌いきった。

歌に力が入るあまり、硬く閉じられた瞼の縁からは涙が漏れ出ている。

「ナガセ、どうしたんだ突然？」

「なんでもない。どうしようもない唐変木野郎と

自分に嫌気がさしただけ。」

いつもと変わらない日常を過ごしていたつもりなだけに自分のことと素直に受け取れないが、

長瀬の言い草や態度からして

「どうしようもない唐変木野郎」とは俺のことだ。

10年近い付き合いになるのに今更勘違いするわけない。「それってどういう意味だよ……」

「そのままの意味。」

曖昧な答えではぐらかした長瀬は

そのまま階段を下りて行く。

「俺、何かしたか!？」

「なんでもない。」

「…私たち、どこで行き違ったんだらうね。」

#29 Engineer I

長瀬のあの態度はいつたいどういう意図が

あったのだろうか？

あの歌にも意味があったのか？

曲名さえわかれば手がかりになるか…？

『はい隙あり〜！』

「あっ…!?!」

無線から聞こえたカトラスの声に俺が

マヌケな声を漏らした直後、

ズダダダンという音とともに俺の背中に鈍い痛みが走った。

ーードウウウウウウン

耳障りな効果音とともに目の前にLOSEの文字が現れ

自身の敗北を告げるが、

戦闘に身が入ってなかっただけにその実感も薄かった。

『どうしたどうしたー？今日も動きが鈍いね〜』

「今日『も』ってなんだよ…。」

『なーなー！もう一戦やろうよ！』

俺の尻すぼみな抗議を無視して再戦を求めろ

カトラスの表情からは、3連勝の嬉しさが滲み出ている。

一勝につき娯楽室の食べ物1つを賭けていたので

これ以上負け続けるとどうなることやら…。

しかしそれ以前に、

「悪い、今日は調子出ない。」

リアルとゲームは別に考えるようにしていたにも関わらず、

先日の長瀬の態度や言葉が気になって頭から離れない。

別にそれが原因で負けたとまでは言いたくはないが、

そうではないと否定できないのもまた事実だ。

『ちえっ…！』

あと一勝で新作スイーツコンプできたのに…』

新作スイーツ3つ分、合計で30クレジット。

円に換算すると3000円がカトラスの

仮想の胃を満たすために消えた。

1ヶ月分の接続料に相当する大出費…。

1つ1000円もする高級スイーツを恨むべきか、

勝負に負けた自分を恨むべきか。

生クリームを口の周りに付けてケーキを頬張る

カトラスの傍らでそんなことを考えながら

窓の外を見ていると、

青い機影が着陸するところだった。

見たことの無い機影…

カナード翼に前進翼、垂直尾翼は内側に曲がっていて、

腰のあたりから生えるエンジンはロボットアニメに

登場する補助ブースターのように巨大だ。

窓の前を通り過ぎる時に垂直尾翼のエンブレムが見えた。

ひっくり返した『核』を意味するハザードシンボルと不気味に笑う。ピエロを組み合わせたエンブレム。

もう2度と見間違えるはずの無いトードのものだ。

「んん、ほーほは！」

「うわっ!?!お前……!」

口にケーキを頬張ったまま何か喋るカトラスに

視線を戻すと、某フライドチキンの

カーネルおじさんと見紛うほど大量の

生クリームを口の周りに付けていた。

「どう食ったらそこまで汚れるんだよ……!」

カトラスの口元をおしぼりで拭っていると、

もう1機別の機体が着陸する。

トードと同じ前進翼の機体だが、機体のシルエットが

醸し出すオーラはどちらかというと東側の戦闘機を

彷彿とさせる。

2人目の前進翼のプレイヤーがハンガーに入る手前、

メニュー画面を操作してヘルメットを外した。

後頭部で纏められたブロンドのポニーテールが解放され、滑走路を吹く風になびく。

そのプレイヤーはトードと何度か言葉を交わすとそのままハンガーに入って出てこなくなった。

代わりに出てきたのはトードだ。

俺の視線に気付いたのか、トードは俺に手招きする。スイーツに夢中なカトラスを置いて滑走路に出ると、どこにでもいそうな黒目黒髪の青年が立っていた。何気にこいつの素顔を見るのは初めてな気がする。

「行く先々でやらかしてるらしいな、シヨウ。」

「……」

「オイオイ、しらばつくれる気か？」

疫病神の名は俺の耳にも嫌ってほど聞こえてるぜ。」

ああ、そのことか。

いい加減に運営からそのままの二つ名を受け賜わりそうな気がしている。

しかしそれよりなにより言うべきは、

「知るか。それよりなんだ、あの新入りは。

実力があるのは認めるが、はつきり言つて問題児だ。」

セーナの事だ。

俺に非がないわけでは無いが、

言う事聞かないし頭固いし暴力的だしで

どうにもこうにもと言う感じ。

「あいつは俺のお気に入りだ。それ以上悪く言つてみる。」

どうやら地雷を踏んだみたいだが、

お気に入りをよそ者に預けるとは一体

どういう神経をしているのだろうか？

「ならなおさらお前のそばに置いとくべきだろ。」

「分かつてないな。」

「一番ヤバそうなどこには一番信頼できるやつを

置いとくんだよ。」

自分のクランに呼んでおいてヤバい奴扱いとは

いよいよ泣けてくる。

「そんな事よりアレだ」

トードは面倒臭そうに俺を軽くあしらってハンガーの方へ歩き出すが、

まだまだ話すことは沢山ある。

トードの後を追ってハンガーに入った俺の視界に、さっきのプロンドのポニーテールのプレイヤーが映る。

容姿からしてたぶん女性プレイヤーだが、

彼女はレンチ片手にハンガーの天井から吊るされた機体セットのエンジン部分を覗き込んでいる。

「お前らの機体を改修してもらおう。」

トードの言葉に反応して振り返った

ポニーテールのプレイヤーは目が合うと同時に

興味を失ったと言いたげに再び機体セットに向き直る。

「なあ、その前にさ…、

このクランの女子率高くないか？」

「ん？ああ…。」

俺の言葉にトードは疑問符を浮かべるが、

彼女の頭に視線をやって納得したような

表情を浮かべる。

「あいつはカルシアって言って」

「悪いが俺は男だ。」

トードの話を遮って放たれた音声は

男とは言いづらい高音を保っていたが、

その口調やツナギの袖を腰に巻いて現れた上半身は

彼女が「彼女」ではなく「彼」であることを視覚に訴えていた。

「ん……ん……」

あいつはカルシアっていう名前であちの整備士だ。

整備の腕は一級品、そして見ての通り脱いだら凄い。」

咳払いして言うほどのことではなさそうだが、

たしかに外見で女と決めつけてしまっている人間にとつて

カルシアの適度に引き締まった筋肉や

しつかりとした肩には衝撃を受ける。

どう見ても男性プレイヤーのそれだ。

「ぶっ殺すぞトード。」

そして口が悪い。

「そのアバターでその髪型って…」

「なんだ？」

口調の割に目に力は無く、セーナやマリーのような殺気も感じない。

故に、いつもと違って率直な感想がポロツと出た。

「ネカマプレイってやつか？」

「レンチで頭叩き割るぞ。このボケが。」

#30 Engineer II

「つたく…、トード。なんでこんなヤツ雇ってるんだ？」

『『こんなヤツ』などと呼ばれるのは心外だが、

その質問の答えは俺も知りたかった。

眉を寄せて不快な表情を作りつつ聞き耳を立てたが、

「うん？なんでだろーなあ？」

本人からその答えを聞くことはできなかつた。

マジ亘が俺を雇うことに政治的な意味があることは

カールターナーに聞いたが、

そんな理由で雇ったプレイヤーに大金を支払い、

加えて重要度の高い任務に就かせる意図が読めない。

…もしかするとただ単に俺の考え過ぎで実は

これ以上大した意味はないのかもしれない。

「それはさておき、カルシア。

こいつの機体のカスタム、頼んだぞ。」

「おい、ちよつと待て。」

トードは前々から決まっていた事を頼むような口調でカルシアに言ったが俺はそんな話聞いてない。

「出会って数分の相手に自分の機体を任せられるかよ。」

「まあそう言ってくれるな。」

性能が上がることはあっても下がるようなことは絶対に無い。」

眉間にシワを寄せる俺の肩に手を置いたトードはそう言つてハンガーを出て行く。

知りたい事をまだ何も聞き出せていない俺は

トードの後を追おうと踵を返すが、

そこをカルシアに呼び止められた。

「なあ、アンタがトードを追つかける理由なんて

知りたく無えし聞く気も無え。

でも、こちとら朝から2時間ぶつ通しで

ここまで飛んできたんだ。

アンタの機体を弄る為だけにな。」

足を止めてカルシアの方を振り返ると、

彼は整備していた自分の機体をメニュー画面を操作してストレージに収納する。

「それに俺はこの後の予定もビッシリだ。

イエスカノーの2択で答えな。

アంతは自分の機体を改修する気があんのか？」

1時間後

結局、自分の機体が心配でしようがない俺は改修が終わるまでの1時間近くの間

ずっとカルシアに付きっ切りで居たため、

追いかけて今後のマジ卍の方針はあるのか

問いただすつもりだったトードは見失った。

「ふう…、これで終わりだ。」

パツと見た感じ特に：いや、何も変化は無いが、
メニュー画面を操作して機体のステータスを見てみると
恐ろしいほどに数値が上がっている。

「ピッチ、ロール、ヨーの強化にエンジンの出力強化、

エアブレーキの換装で減速性能も上げておいた。

まああとのことは自分で試してみな。」

促されるままに機体セットを体に装着し体を振ってみると、
心なしか幾分か軽くなった気がする。

「気づいたか？」

俺の表情を察したカルシアは得意げな笑みを浮かべた。

「少し前に手に入れたばかりの新型複合素材だ。

機体強度を上げながら重量を落とせる。

ファイター並みとまではいかねえが、

鼻くそほじりながらも余裕で渡り合える程度には

なってるはずだ。それと：」

そこまで言いかけたカルシアは

足元の工具箱の隣に置かれたペリカンケースを

俺の前の机にドンっという効果音を伴って置き、

ケースを開いた。

「Electromagnetic Launcher
E M L だ。」

現れたのは超未来チックな垂直二連散弾銃と

例えるのが適切だろうか？

純白のボディのそれは散弾銃でいう2本のバレルの間に隙間があり、右利きの射手が左手を添える位置から後方にかけては

本体同様の白いパーツが2本のバレルを覆う構造になっている。

「散弾銃か…？」

「鳥撃ちじゃ無えんだ。こいつぁレールガンさ。」

使い方を説明する。」

カルシアは散弾銃では無いと言ったものの、

中折れ式の散弾銃と同じように

ストックとバレルの間でレールガンを折るり、

現れたバレルの後端に乾電池のようなサイズの

円錐形の物体を差し込むと、

レールガンを元の形に戻してハンガーの外に狙いをつける。

照準の先にあるのは燃料タンクだ。

「ちよつ…!?!」

当たれば大爆発を起こして隣のタンクにも誘爆するだろう。

慌てて静止しようとする俺を気にする様子もなく

カルシアの指は引き金を引いた。

ーピピッ

『Error::Please supply power』

「…はあ?」

俺が本気で慌てた割に何も起きなかったせいで

マヌケな顔をしていたのは置いといて。

結論を言うと、弾は出なかった。

弾丸が音速を超えたせいで視認できなかったとかではなく、引き金を引いてもEMLからは塵ひとつ発射されなかった。

「なーんてな。」

「こいつを撃つにはそれ相應の電力が必要だ。」

「つまり？」

「EMLは特殊兵装扱いでな。」

「ミサイルみてえな誘導機能が無い代わりに

大抵の航空機は一撃でサヨナラだ。」

話を聞く限りはとても魅力的でロマン溢れる武器だが、要は飛びながら飛んでいるマトを狙い撃てということだ。

相当な熟練技が必要とされるだけでなく、のんびり狙っているのと逆にマトにされてしまう。

だが、使いこなせばこれは強みになる。

「それなりにデメリットも多いが、

そこはアンタの腕次第だ。」

「ほらよ、と軽く渡されたEMLだが、

受け取るとそれは想像以上に重く、受け取った腕が10cmほど下に下がるほどだ。

試しに構えてみると、狙いを定める照準器は

中心に置かれた点を起点に円が描かれているだけの

シンプルなものだ。

「照準器の中心に点があるだろ？」

撃ち出した弾はそこに飛んで行く。

円は衝撃波がダメージを与える範囲だ。

手負いじゃない限りなんてこたあ無えが、

耳鳴りはする。」

「なるほど……」

ハンガーの外、遙か上空、

成層圏で燃えているに

照準器の点を合わせて追い続ける。

「いくらレールガンつっても射程はあるんだ。

そりゃ流石に無理だ。」

「分かっている。」

「じゃあ、そいつはどうする？」

俺が抱えるEMLをアゴで示したカルシアに

俺は考えるまでも無く答えた。

「使ってみるよ。使いこなしてみせる。」

#31 Falling Angel I

数週間が経ち、現実世界では秋が来ようとしていた。

俺の予測に反してケモノフスタンの動きはおとなしいまま
不気味なほど静かだった。

砂漠エリアのカラ基地に所属が変わった俺は、

ハンガーの前にイスとサイドテーブルを広げ

日傘を立てて昼寝をしながらフェンスの外を眺める。

地平線の先まで砂漠が続くが、

ここにはあのクソ野郎テルキスがいない分

とても快適だ。

あの声が聞こえなくなると思うと

今にも舞い上がりそうな気分だ。

実際、機体セットを装備すれば舞い上がれるが、

無許可で離陸すると撃墜されかねないので今は抑える。

それはさておき、

今日はスクランブル待機に入れなかったマジレメンバーの穴埋めとして呼ばれたため、

こうしてハンガーのど真ん前で暇を潰しているわけだ。

別にそれだけが理由ではないが、

何があるうとここから動くつもりはない。

なんたつて外気温はもうすぐ41度になるらしい。

仮想世界のため多少は軽いはずだが、

現実世界がちょうど過ごしやすい気候になってきているだけに

そのギャップは大きい。

「あつちい……」

日傘を立てているにも関わらずフェンスの先にある砂漠は

加減も知らずに日差しを照り返す。

ヘルメットのバイザーを下ろした俺のイスに衝撃が走った。

ーガンっ

「ブリーフィング」

声とイスを蹴った脚の主はマリーだ。

チームにセーナを加えて以来ずっとこんな感じだから

きつと暑さのせいでは無いのだろう。

「わかった、すぐ行く。」

ブリーフィングルームに入った俺は、

左右をマリリーとセーナに挟まれるように席に着く。

ほんの一瞬、ハーレムという言葉が脳裏をよぎるが、

2人の意識は俺では無くお互い。

俺はただの緩衝材扱いだ。

何はともあれ、周囲には俺たちの3人以外誰も居らず、

誰かが入ってくる気配もない。

最後に1人、入室するが、

薄暗い部屋に浮かび上がるそのシルエツトに

俺はわずかながら不安を感じてしまった。

「全員居るな？よし、始めよう。」

そう、声の主はテルキスだ。

「…マジかよ。」

「なんだ？俺が指揮官で不満か？」

ホログラムの光はテルキスのメガネでキラリと反射し、見る者にインテリ官僚的なイメージを抱かせる。

「ああ、そうとも。ご名答だテルテル坊主。

てか何でお前が居るんだよ。」

「なんだ、聞いてないのか？」

「貴様らはこの基地に移動しただけで

それ以外はこれまで通り何も変わらん。

恨むなら貴様の雇い主を恨め。

では、ブリーフィングを始め。」

テルキスがメニュー画面を操作すると、

ただっ広い砂漠がホログラムで表示される。

「今回の任務は機密情報の奪取だ。

本日未明、A F O の運営から新規ミッションとして

追加されたものだ。」

「それは重要?」

マリーの問いにテルキスは眉をピクリと動かす。

「克蘭の運営上はなんら影響は無いが、

重要な“情報”だ。」

「情報…?」

「あとは戦術マップを観た方が早いだろう。」

ホログラムを操作して戦術マップを表示したテルキスは少し脇に移動すると腕を組んで背中を壁に預けた。

ホログラムに映される砂漠の風景に変わりは無いが、

映し出される砂漠の中央に双発のレシプロ機の様子をした人影が横たわっている。

背中についた大型のレーダーや翼の形からして

E-2早期警戒機だろうか。

ネームドキヤラなのかマップ上の光点には

『Angel』の文字が表示されている。

「ミッションの受注と同時に更新されたのが

この戦術マップだ。」

さらにテルキスが操作を加えると、

マップ上に無数の敵NPCの地上ユニットが現れる。

俺とマリー、そしてテルキスの視線が

レイヴン隊で唯一攻撃機を使うセーナ一人に集まった。

「なんだ。私の顔に何か付いているのか。」

童顔ツリ目がキリツと睨みを効かせ、俺は目を逸らした。

視界の隅でセーナが腕を組み、たわわな果実が

ぷるん、と狭そうな腕の中に収まった。

いや、見た感じ収まりきってはいないが。

「今回の主力はセーナに任せる。」

シヨウとマリーはセーナを敵の戦闘機から守れ。」

テルキスが咳払いを混ぜて話を切り出した。

「また、今回のミツシヨンは

他のクランと遭遇する可能性がある。」

「話を重ねて悪いが、

そもそもその情報って何なんだ？」

テルキスは教えても良い情報かどうか考えているのだろう。

少し唸ってから顔を上げた。

「まあ良いだろう。」

今回のミツシヨンで回収する情報は次回のアップデートで追加される新要素に関する事前情報だ。」

なるほど、それなら重要だ。

ソロでやっていた事にも有ったが、AFOの運営は面倒な事に、普通のゲームならホームページやインターネットで

発表するような情報を情報収集ミツシヨンとして

公開している。

良く言えば遊びゴコロがあると言えない事もないが、

ミツシヨンを受注したクランが多いと

こうしてNPCが包囲するようになる。

ソロプレイヤーでもミツシヨンの受注はできるし、

頭を使えば誰よりも、どのクランよりも早く

クリアすることは可能だが、

情報には当たり外れがあつて挑むリスクが高すぎるため

俺は挑戦したことがなかった。

「貴様らレイヴン隊の任務は現地に誰よりも早く向かい、墜落地点の周辺を制圧。」

シヨウ、貴様の特殊兵装枠に搭載した

無線中継ポッドを使つて情報を奪い取ることだ。」

戦術マップに俺たちを表す光点が現れて

敵ユニットを制圧すると、

俺を表す光点は墜落地点の上空を旋回しだす。

「墜落地点制圧後はポッドを起動して

墜落地点上空半径5km内を旋回、

作戦空域のストレスを飛行するカールターナーが

貴様のポッドを中継して情報をダウンロードする。」

「ん……別にポッドだけあれば情報は取れるはずだろ？」

攻略情報ではダウンロード前にいかにテンポ良く

敵を殲滅し、制空権を確保し続けるかが

重要だという話だったが、

カールターナーが関与する事で何か利点があるのだろうか？

「E-767早期警戒管制機のスキルを使う事で情報処理速度が

段違いに向上する。

つまり、ダウンロードにかかる時間を

大幅に減らせるという事だ。

俺は貴様如きが迫り来る無数のミサイルを
全て躲せるとは微塵も思っていないからな。

もしものための保険だ。」

#32 Falling Angel II

「心配するな。貴様らは墜落地点を制圧して

その周りをクルクル飛び続けなければならない。」

テルキスは簡単に言ってくれるが、

作戦空域の全方向から来るであろう

他クランの部隊は流石に俺たちだけの手に負えない。

マリーも同じ事に気付いたようで、

テルキスにその事を質問すると

腕を組んでおとがいに手を当てた。

セーナと違つてこちらはすっぽり隠r：収まり、

見る者にクールな印象を与える。

このサイズ感や立ち振る舞いにはどこかで見覚えがあるが、

記憶を探る俺の思考をテルキスが遮る。

「その心配は無い。」

作戦空域外周部に双メティとサンデー子とカトラスを待機させる。

他に質問は？無いならさっさと飛べ。」

半ば蹴り出されるように追い立てられた俺たちは
数分後には滑走路に並んだ。

《こちらカラ・タワー。

レイヴン隊、離陸を許可する。》

「了解。レイヴン隊、離陸する。」

前に並んだマリーとセーナがエンジンの出力を上げて走り出し、
俺もその後が続く。カルシアの改修のおかげか、

いつもより短い滑走距離で体がフワリと浮き上がった。

あまりの動作の軽さに機体を時計回りに1回転させてみる。

『レイヴン1、遊ぶな。』

俺の一举一動を監視している（らしい）セーナに注意されるが、
そんな言葉は頭に届かないほど俺は興奮していた。

今ならF-22Aのような戦闘機相手でも戦えそうだ。

編隊から離れない程度で機体の動きを確かめていると、
『レイヴン1、浮かれてる。』

もう1年以上の付き合いになるマリリーにまで注意された。
わかつたわかつたと編隊に戻った俺は、

マリリーの横顔が少し嬉しそうにニヤけている事に気付いた。
確かマリリーの機体もカルシアに改修されたはずだ。

「2人とも。久し振りの任務だから機体チェックを。」

『…了解。』

マリリーは俺の意図を汲み取ってくれたようで、
返事と同時に一気に機首を上げて急上昇した。

雲を突き抜け、さらに高度を上げる。

肉眼では見えないところまで行ってしまったマリリーと対照的に、
セーナは軽く機体を上下左右に振っただけで

チェックを終えている。

「良いのか？」

『日頃からこまめに機体を見ていれば』

あんなマニユーバをやってまでチェックする必要はない。』

「そうか…。」

数分で戻ってきたマリーと改めて編隊を組み直した俺たちは10分と経たないうちに作戦空域に入った。

こういう情報収集ミッションは複数のプレイヤーが

同時にスタートできるよう独立したマップが作成されており、開始時刻より早く作戦空域に入ったプレイヤーは

同じ風景の場所を開始時刻まで延々と飛び続けることになる。

怪奇現象染みた状況になるのはもちろん、

その間は1mmも進んでいないという物理法則ガン無視のゲームだからこそできるシステムだ。

まあ、何もできないわけではなく、

その間に消費した弾薬はカウントされないので、

普通は仲間内で模擬空戦をやって時間を潰すのだとか。

俺たちはミッション開始の数分前に到着したため、

すぐにミッション開始のメッセージが視界に広がった。

《こちらAWACSエッジレス。

レイヴン隊、天使隊、よろしくね。》

回線を軽い挨拶が飛び交ったところで

エッジレスことカールターナーが指示を出す。

《作戦内容はもう知ってると思うから省くね。

支持を出すときはレイヴン隊と天使隊で

別々の回線を使うのでご心配なく。》

ブツ：ブツ：と無線が切れる音がしたかと思うと、

《よし：あー、あー、聞こえる？》

「こちらレイヴン1、聞こえます。」

《じゃあ指示を出すね。作戦空域内の敵集団は2グループ。

一方は天使隊が対処中で、

もう一方はそこから見て10時方向から接近中。

長射程のミサイルがあつたとしても射程に入る頃には

そつちが先に墜落地点にいるから安心して方位そのまま。》

指示内容の確認のためにマップを見ると、

確かに敵はまだ遠くにいる。

向こうも最高速度でかつ飛ばしているようだが、カルシアに改修してもらった俺たちの比じゃない。

「よし、墜落地点周辺に敵機はいない。」

地上の制圧はセーナに任せる。マリーは俺の直掩を頼めるか？」

『了解。』

『オツケー』

セーナはスロットル全開で敵に突っ込んで行き、

マリーは少し減速して俺の背後に着いた。

マリーの方を横目で見ると

彼女の翼にはいつも通り対空兵装が吊るされている。

いつもとちがうのは今回マリーが4 A A Mを

積んでいることだろう。

いつもなら俺が4 A A Mで相手のフォーメーションを

乱す役目を果たしているが、

今回の俺の兵装は無線中継用のポッドで、

戦闘能力は無いとまでは言わなくともそれに等しい。

前方の墜落地点周辺で火柱が上がり始めてすぐに

カールターナーから悪い知らせが届いた。

《方位1—9—0からボギーが急速接近中。

機数は3、確実に敵機だから警戒してね。》

「こちらレイヴン1、迎撃は間に合うか？」

カールターナーのデータリンクのおかげで

作戦空域全体を見渡せるレーダーには南側から

俺たちの方へ飛んでくる3機の機影が映っている。

《正直言うともムリね。自力で頑張つて。》

#33 Falling Angel III

広域レーダーを見ると、カールターナーの警告通り

3機の機影が墜落地点に向かっている。

このままでは制圧した墜落地点の制空権を

横取りされる形になってしまう。

情報を求めてミツシヨンを受注した割には

遅い到着だが、敵は元からそのつもりだったのだろう。

地上を制圧する事を考えると攻撃機が必要になるが、

他のチームが地上を制圧してくれているなら

あとは戦闘機でゴリ押しして制空権を確保すれば良いだけの話だ。

「やられたな…。」

敵がミサイルの射程に入るまでは数分とかからないだろう。

選択肢は無い。

「マリー、作戦変更だ。方位1—9—0に向かつて

敵機を迎撃する。」

「わかった。」

俺が右へ旋回し始めるとマリーは俺の頭上、つまり背中にびったり張り付くように旋回してきた。

「なっ…」

動揺を隠せない俺に追い討ちをかけるように

マリーは手を伸ばして俺の主翼に手を添え、

主翼に触れた手はそのまま肩甲骨を撫でて、肩を掴む。

「レーダーを騙すため。」

確かに、AFOのレーダーは2D表示で

高度差は表示しないため、

理論的にはこの体勢だとレーダーには1機としてしか

表示されないはず。少しでも操縦をミスすれば空中衝突で

2人とも事故死扱いになりかねない体勢の中、

俺は背後で口角を上げているであろうマリーの表情を

想像して口を開く。

「それだけ…か？」

俺の肩を掴む手に力がこもる。

2人の間に緊張感と数秒の沈黙が流れ、
そしてマリーが口を開いた。

「シヨウは私の僚機。だから…ダメ。」

何が、と聞くのは野暮な話だ。言われなくても分かる。
考えるまでも無く心当たりならあつた。

マリーが言っているのは俺とセーナの距離感。

セーナを隊に入れて最初の任務の時に

セーナの戦闘力を低く見た俺はセーナを直掩につけて

マリーを前衛に出した。

結果として俺の心配は無駄に終わったのだが…。

自分なりに効率を重視し過ぎたあまり、

マリー自身の僚機としての気持ち完全に無視していた。

「そうだな…、わかっている。」

肩を掴む小さな手に優しく手を重ね、

2人がソ口同士だった頃の挨拶をする。

「じゃあ…バディを頼めるか？」

肩を掴んでいたマリーの手はそれに答えるように

俺の手を握るとゆっくり肩甲骨をなぞり、
「もちろん。」

その答えとともに俺の背中を軽く押し、
頭上を追い越して雲の中へ飛び込んだ。

その先の米粒のようなサイズで見える敵機は

雲の中に消えたマリーを警戒するような動きを見せながら
雲を迂回して俺の側面を突く針路を取る。

HMDにも敵を表す緑色のコンテナが3つ現れ、

Su-33と表記された。

「エッジレス、こちらレイヴン1。」

敵機を視認した。機種はSu-33、機数3」

言わずと知れたスホイ設計局の戦闘機だが、

Su-33はSu-27を基に設計された艦載機だ。

艦載機と言うだけあって空母でコンパクトに収納する為に

翼が折り畳めるようになっていたり、あまり兵装を積めない分、

格闘戦能力を強化してあったりと、

使い方によってはとても厄介な相手だ。

『…フランカー』

マリリーのMiG-29Aを設計したミグ設計局とスホーイ設計局はソ連を支えた二大巨頭。

言い方を変えればライバルとなるだけに、MiG愛好家のマリリーの闘志に火がつく

《了解、ちょうど手が空いたカトラスを向かわせたから適当にあしらって時間を稼いで。》

「わかった。シヨウ、エンゲージ。」

『マリリー、エンゲージ。』

ーWARNING：WARNING

とは言うものの、敵に横っ腹を見せている俺に自分がロックオンされた事を警告音が伝えてくる。

「マリリー、ロックオンされた。そっちは？」

『何も。このまま敵の上から入る。』

「了解、敵の注意を引く。」

雲に入ってリーダーから姿を消したマリリーの位置をイメージし、

マリリーに対する敵の注意を引き離す飛び方をしなければならぬ。

だが俺はまともに正面からはぶつかれない。

向こうは射程の長い特殊兵装で狙えるが、

俺が特殊兵装で積んでいるのは文字通り「特殊」な中継ポッドだ。

何か出来ることと言ったらカールターナーとの

無線通信やデータリンクが安定するくらいで、

それくらいしかできないくせに対艦ミサイル並みに重い。

正直言つて邪魔臭い。

しかし、今回の作戦の要である以上は

機関砲弾の1発すら浴びる訳にはいかなかった。

「ミサイル接近、回避する……」

敵が発射したミサイルを

俺はフレアを放出しながらバレルロールで回避した。

空気を切り裂く音とともにミサイルとすれ違う。

背筋を死神に撫でられるような感覚に思わず身震いする。

アフターバーナー全開で逃げたくなる気持ちを抑えて

背後を取られないよう俺は敵とヘッドオンした。

俺の方はまだ通常ミサイルの射程に入っていないが、

ロックオンしないまま無誘導で1発のミサイルを放った。

「FOX2!」

無論、ハツタリだが、3機の編隊飛行が少し崩れ、

『隙あり。』

その隙をつくように

雲に隠れていたマリーが敵の頭上から襲い掛かり、

敵の1人とドッグファイトに入った。

残りの2機は援護出来る位置を取ろうとマリーの背後を取るが、

さほど狙いもせず発射されたミサイルを

ひらりひらりと躲してカラスを思わせる漆黒の翼を

翻したマリーはあつという間に

自分の背後についた別の敵の背後を取り返して

ミサイルを1発命中させ、

そのまま敵を追って雲の中へ消えた。

背後を取られた味方を助けようと雲に向かう敵を

今度は俺が狙う。

間合いが一気に狭まり、通常ミサイルの射程に入った。

ロックオンされた事に気がついた敵2人は編隊を解き、

1機は低空に逃げ、もう1機が蛇のように機首を上げるコブラで

俺の背後に回り込もうとする。

しかし俺は回避より攻撃を優先した。

コブラで俺の背後に回った敵機を引つ張ったまま

低空に逃げるもう1機を追いかける。

低空に逃げた敵機は遮蔽物の無い砂漠の上を

右へ左へ旋回を繰り返しながら逃げて行く。

おそらくシザースと呼ばれる

マニューバをやっているつもりらしいが、

俺の機体はカルシアの改造で通常とは比べ物にならないほど

機動性が上がっている。

相手の旋回のタイミングを見てから反応しても

十分に間に合うし、加速と減速の性能も上がっているため、

相手は俺が普通のF/A-18Fと思つて格闘戦を

挑んだ時点で不利だ。

しかし、もう1機の敵に背後を取られている俺の
圧倒的不利は変わらない。

唯一の救いは俺と俺が追う敵機が視界の中で重なり過ぎて
まともに撃てないことだろう。

A F Oにおいて誤射はかなり減点される上に

回数を重ねるとレッドプレイヤー認定されてしまう。

判断はI M C Pと呼ばれる自立管理制御プログラムが

その時の状況やログ、プレイヤーの発言などを基に行うため、
攻略サイトに載せられるほど厳密な判断基準が存在しない。

極端な例えを挙げれば、I M C Pの判断次第では

1回の誤射でレッドプレイヤーになる。

それ故に、俺の背後の敵はタイミングを

見定めようと時間を掛けているのだ。

まあ、あまり時間は無いが。